東京財団研究報告書

2004-11

現代インドの実体研究

森尻純夫　インド・マンガロール大学客員教授

The Tokyo Foundation

TKFD
THE TOKYO FOUNDATION
東京財団

東京財団研究推進部は、社会、経済、政治、国際関係等の分野における国や社会の根本に係る諸課題について問題の本質に迫り、その解決のための方策を提示するために研究プロジェクトを実施しています。

「東京財団研究報告書」は、そうした研究活動の成果をとりまとめ周知・広報（ディセミネート）することにより、広く国民や政策担当者に問いかけ、政策論議を喚起して、日本の政策研究の深化・発展に寄与するために発表するものです。

本報告書は、「現代インドの実体研究プロジェクト」（2003 年 10 月～ 2004 年 3 月）の研究成果をまとめたものです。ただし、報告書の内容や意見は、すべて執筆者個人に属し、東京財団の公式見解を示すものではありません。報告書に対するご意見・ご質問は、執筆者までお寄せください。

2004 年 9 月
東京財団　研究推進部

目　次

第１章　インド・２００３年 …… 1

1　１月、川口外務大臣の訪印 …… 1

2　５～６月、国内テロとインド・中国ドクトリン …… 2

ムンバイ爆破テロ …… 2

バジペイ首相の中国訪問 …… 3

3　９月、中国の反応 …… 3

4　印パ停戦ライン策定協定と南アジアサミット …… 4

5　南アジア経済圏の連携成立が和平政策 …… 6

第２章　インドと南西アジア周辺国 …… 9

1　スリランカ　復興とインド …… 9

ゲリラ・タミール解放の虎 (LTTE) とインド …… 9

スリランカ復興国際会議 …… 9

復興と政治経済 …… 10

2　ネパール　内戦からの 10 余年 …… 11

議会制と王政 …… 11

マオイストと麻薬 …… 11

マオイスト掃討作戦 …… 12

ネパールの政情 …… 12

3　パキスタン　宿怨の対インド …… 13

氷解、印パ関係 …… 13

イスラムと軍部 …… 14

ムシャラフの和平策と軍部 …… 15

第３章「南アジア首脳国会議」以後のインド …… 16

1　インド・パキスタンの個別合意 …… 16

2　南西アジアとアラブを結ぶ少数民族 …… 16

3　アフガニスタン、パキスタン、インドとアメリカ …… 18
4　二極化する世界 …… 18
5　国連は情況を救えるか …… 19
6　6月の先進国首脳会議での大中東構想 …… 20
7　提言：日本はどうする …… 20
アセアン（ASEAN）と南アジア（SAARC） …… 20
中東、南アジア情勢と日本 …… 21

参考文献一覧 …… 23

付録1　調査記録（インド防衛大臣に関する調査報告） …… 24
2　インド最前線 '03 ～ 04 …… 27

第1章　インド・２００３年

1　1月、川口外務大臣の訪印

2003年、インドの年頭は川口外務大臣の訪問からはじまった。

外相の訪問はスリランカ、インドそしてフランスへ足を延ばす予定であった。日本では新年の休暇期間である松の内からスリランカ、インド訪問というのは平常のこととはおもわれない。緊急を要する案件が背後にあるとおもわざるを得ない。年末にはインド英文紙「ザ・ヒンドゥ」に外相のインタビュー記事が載った。近年なかったことだ。

歴訪の目的はスリランカ復興世界協議にむけてスリランカが抱える「タミール解放の虎（LTTE)」による反政府ゲリラ活動の終結とその後の復興への貢献を協議することにあった（付・資料)。スリランカ復興会議はノルウェー平和外交政策の長年の努力が実ってようやく実現にこぎつけたものだ。しかし外相のインド訪問はスリランカの隣国インドへの表敬といったことではなかった。

インドの核実験（89年）以来停止していたインドへの援助をあっさりと再開し、首都デリーの地下鉄建設にも出資するという大きなプロジェクトを発進させた。新聞各紙の扱いも日本の要人訪問ではかつてないもので、二日間に渉って一面にカラー写真で紹介された。

訪印後のまとめ記事では「日本は南アジア政策、インドへの対応を変えた」と論評されていた。

こうした日本のインドに対する政策転換は二ヵ月後に迫っていたアメリカのイラク攻撃開始に無縁ではなかった。

インド洋、ベンガル湾、アラビア海の交差するインドならびに島嶼国スリランカ周辺洋上がイラクへの戦略上の要路であることはいうまでもない。

日本政府のスリランカ、インドへの政策転換はアメリカの軍略と無縁ではなかった。かねてから親米に傾いていたインドは過去のいきさつを捨ててスリランカへの干渉を止める合意を日米に与えた。

インドにとってスリランカは亜大陸の尻尾でありその一部だという意識が強い。島国スリランカは原住シンハラ語族と前一世紀頃南インドから侵攻してきたタミール語族が20パーセントほど共存し仏教とヒンドゥ教共同体が併存している。イスラム教徒もアラブ系、南インドからの流入の二系統がいる。ヒンドゥであるタミール語族に対してインドは近縁感を強く抱いている。反政府ゲリラLTTEへのインドの関与、支援が噂されていた。インド政府はLTTEと飲無縁と不干渉を表明する必要があった（02年12月）。

スリランカ復興援助国際会議（03年3月、通称：箱根会議）を企図し事前交渉にやってきた川口外相をインドは最大級の待遇で歓迎した。そこには南アジア随一の大国を自認するインドが選択する道として妥当な条件があった。インドから観た意義を以下にまとめた。

a) 鼻先の島国スリランカへの発言力を保有しつつ核保有によって長期に渉って正常化できなかった日本からの援助を再開することになった。

b) アメリカとの関係緊密化を図りながら南アジアでの主導的位置をバジペイ内閣は確保した。

インド経済界もただちに呼応し、水産、観光、流通業界はLTTEの沈静化とともに経済復興と振興に加担する活動を開始した。

バシペイ政権のこの政策に多くの国民的支持が与えられた。

2　5～6月、国内テロとインド・中国ドクトリン

ムンバイ爆破テロ

5月初旬、インド有数の観光地ムンバイのインド門、野外駐車場で爆弾テロが起こった。50人を越す死者と多数の負傷者が出た。日本人観光客が巻き添えにならなかったのが偶然の幸運だった。日本人旅行者は必ず訪問するポイントなのだ。テロは同時多発であった。ムンバイ市内でもう一ヶ所が襲われた。

このテロ後、警察は数人の容疑者を逮捕した。市内のスラムに隠れ住んでいた。迅速な捜査であった。彼らはどのような人物だったか。インド国籍をすでに持たないインド人と中東諸国に出稼ぎに出ていた還流者たちだと発表された。アラブ首長国連邦で仕事をしつつアフガン、パキスタン国境地域でゲリラ訓練を受けたという。

この警備当局の発表は事実であろう。通常、このようなテロに対して警備当局は事件の事実を明らかにしてこなかった。政治的なキャンペーン、パキスタンの犯行という一点に終始してしまう。インド内部にテロの要因を抱えていることを政治的に隠蔽してきた。

この事件を契機に、インド政府のパキスタンへの政治戦略が変化しつつあったことを読み取ることができた。国内的にはバジペイ政権が強い基盤を確立したことが理解され、その基盤を梃子にパキスタンと周辺国への戦略が展開されることを予感させた。

バジペイ首相の中国訪問

6月、バジペイ首相は北京を訪問した。中印は1970年代以来正常な関係にない。ベトナム、イラン、そしてカシミール地域の不安定な情勢のなかで中国、インドの国境は常に紛争国を境界としていた。そのために双方は国境を確定することができず小紛争を繰り返してきた。90年代初頭まではインドはソヴィエト・ロシアに仲介を恃んでいた。しかしソヴィエト崩壊後、親米に傾きつつ中国とのあらたな途をもとめてきた。03年6月当時も近接地域には国軍が警備していた。バジペイ首相は紛争国、国交のない国に出掛けたのである。インドの首相が中国を訪問するのは史上初のことだった。

3　9月、中国の反応

9月、中国の政府広報インターネットサイトで、旧シッキム王国、現在のシッキム州をインド領土として表記した。奇妙なことだが中国は30年近くシッキム州をインド領土と認めてこなかったのだ。

シッキムはインドの最東北端、ヒマラヤの麓にあって東西をネパール、ブータンに挟まれ北部は中国（チベット）に接している。1970年代、当時の西パキスタンが現在のバングラデッシュとして独立した時、王国からインドの一州となって併合した。中国にとって独立国シッキム王国はネパール、ブータンとともにインドとの緩衝地域として貴重だった。中国はもうひとつのカシミールになってしまうのを懼れたのだ。それが急変した。背景には、

a) 90年代、親ソヴィエトだったインドがその崩壊後農業、教育の改革を経て経済発展をようやく軌道に乗せた。

b) 21世紀初頭、対パキスタン、カシミール問題を抱えて、経済、政治戦略において親アメリカ路線を選択した。

c) そして現在、イスラエル問題を基軸にしたイラク戦線を抱えるアメリカの軍略が南西アジアの不安定な政治情況を生んでいる。そのなかでアジアの大国になりつつある中国との関係緊密化を図り親米一辺倒にならない均衡を印中ドクトリンに求めた。

具体的な中国との連携は経済振興政策、周辺諸国へのインド・中国による政治戦略の協同化が合意された。印中ドクトリンである。

ひと月を経ずにパキスタンのムシャラフ大統領も訪中しインドの独走を牽制するとともに中パの緊密関係を確認している。カシミールで中国と国境を接しアフガン、イラク戦線を経るなかで親米路線に転換したパキスタンもまた中国との均衡関係を保障する必要があった（後述、パキスタンの項参照）。

こうした動向は年末に実現した印パ和平へ大きな要素になった。

4 印パ停戦ライン策定協定と南アジアサミット

10月になるとインドは一気に動き出した。

現バジペイ内閣はヒンドゥ政党インド人民党（BJP）が中核の連立政権である。イスラム、シックゥ、クリスチャンを交えた多党派内閣である。が実質はヒンドゥ思想に基づいた強力なヒンドゥ政権である。

内閣で強い発言力を持つ副首相L.K.アドヴァニは最上階級ブラーミンが核となって組織されているインド人民党支援組織（RSS）から圧倒的な信頼を得ている。現内閣が史上最強のヒンドゥ政権といわれているのはこの全国規模の支援体制が充分に機能しているからである。各地域州政府の力が強いインドは通常、おなじ党派であっても地域色が強くでて必ずしも中央政権と意思を統一しないことが多い。しかしアドヴァニを支える宗教指導者たちは彼の政治戦略に全幅の信頼を寄せかつてない体制を形成している。

アドヴァニの家系は現在のパキスタン領内のブラーミンでイスラム地域にあって

少数派のヒンドゥだった。第二次大戦後のインド開放独立後インド本土へ移住してきた。ヒンドゥイズムの立場からパキスタンの分離独立に激しい異議を唱えた。1970年代、過激なヒンドゥイストは当時のインディラ・ガンディ政権の施政にことごとく戦いを挑み投獄されている。

アドヴァニと対極にありながら現政権の重要ポストを支える防衛大臣ジョージ・フェルナンデスは南インドマンガロールの出身でカソリッククリスチャンだ。キリスト教義を逸脱した労働運動を経て政界に至った人物だ。彼もまたインディラ・ガンディ時代には非合法活動に堕ちていた（付録;フェルナンデスに関する調査報告)。

現政権はこうした戦後インドを清算し左右の政治思想をあらたな枠組みに置き換えて成立している。そのバランスを取っているのがバジペイ首相なのだ。周辺諸国を含めたインド亜大陸、南アジアの政治、経済基盤を世界規模のものにする、というのがひと言でいう彼らの意図であろう。

10月以降、強硬派アドヴァニはそれと気づかぬほど緩やかにパキスタンへの政策転換を図ってきた。まず現われたのは内政だった。1992年、ヒンドゥ寺院、イスラム寺院モスク建設に端を発したヒンドゥ対イスラムの内乱が全土に拡大し、両三年に及んだ。ヒンドゥを扇動し政治的支援をしたのはアドヴァニだった。結局どちらの寺院も建設を停止することで事態を収拾した。後始末としてヒンドゥ指導者が要求し続けてきたヒンドゥ寺院の竣工を、10年後、あらためてアドヴァニに仰いだ。意外なことに彼は許諾しなかった。アドヴァニはヒンドゥ聖職者たちの不満もまた押さえ込んだ。政権が強力であることを見せ付けた。

ヒンドゥ政権の中枢がヒンドゥ聖職者や上部階層の要求を拒絶したことでイスラム勢力は安堵した。内閣、政府への信頼を高めた。この国内施策が意味するものはインド・パキスタン和平へむけての大きな一歩だった。

12月に実施された停戦ライン確定協定は印パともに内政、周辺国への工作を積み重ねた結果だった（パキスタンの項参照)。

印パ停戦ライン確定は唐突に報道された。11月下旬、パキスタン側からの表明として伝えられた。インド側も報道陣の確認に対して応諾の意向を明らかにした。実は6月中旬、インドネシア、バリでのアセアン会議の直後、インドからパキスタンに提案していたのだ。インドとしては遅い回答を得た、ということだった。続いて

バジペイ首相がパキスタンの首都イスラマバードを03年12月17日に訪問すると発表した。一気に和平への機運は高まった。

12月に入ると17日のバジペイ首相のイスラマバード訪問はうやむやになってしまった。和平のプログラム自体が頓挫かとおもわれた。

しかし事態は速やかに進捗していた。

印パ首脳の関心はイスラマバードで開催される南アジア首脳会議（SAARC）にむかっていた。主催地持ち回りのこの会議は今回、パキスタンの首都イスラマバードに予定されていた。当初は03年末に開催する予定だった。訪問予定の12月17日は首脳会議に合わせた予定だったのだ。それが04年初頭に遅延したというのが真相だった。遅延はパキスタン側の事情にあった。印パ和平への抵抗勢力の動向、カシミールの処遇、各国首脳への警備などパキスタンの国内問題だった（パキスタンの項参照）。

南アジア首脳会議は04年1月6日、パキスタンのイスラマバードで開かれた（付録2：「インド最前線」第16,17回参照）。

会議は三日間、つつがなく開催された。主催国パキスタンはインドを厚遇した。議長国パキスタンはインドの提案した諸問題を議題とし討議に任せた。

インド、バシペイ首相とパキスタン、ムシャラフ大統領の個別会談では停戦ラインの確定はもとより、数年間停止していた列車、バスの相互乗り入れ再開の継続などが語られたと伝えられた。

5　南アジア経済圏の連携成立が和平政策

会議の最大の目的は経済課題だった。インドが中心になって提案した南アジア自由貿易協定（FAFTA）の策定への決議だった。

各国相互の個別会談を含めてFAFTAの策定は参加国の賛同を得た。インド、パキスタン首脳の積極的な事前訪問が功を奏した結果でもある。バジペイ首相は6月以降、西南アジア諸国を訪問外交していた（付録2:「インド最前線」参照）。ムシャラフ大統領もバジペイ首相の後を追うように歴訪している。こうした成果が首脳会議に発揮された（パキスタンの項参照）。

南アジア自由貿易協定に向かった南アジア諸国の意味するものをまとめると、

a) イラクで継続する戦乱とアフガン戦後の流動情況にあってインド亜大陸諸国は親米に傾かざるを得ない。しかし戦略ではイラク派兵といった加担は地政的に難しい。その保障として中国との均衡を図り、亜大陸諸国の結束を獲得しなければならない。

b) スリランカ、ネパール、ブータン、バングラデッシュ、パキスタン、そしてインドなど反政府テロ、ゲリラといった政情不安を抱える諸国が共有する戦略理念を獲得する必要がある。反政府テロ、ゲリラ集団がアフガン、イラクの同種集団と連動することを阻止しなければならない。

c) しかし多様な社会・宗教共同体を内包する南アジア諸国に統一した政治戦略、政治体制を求めることは困難なことである。

d) アメリカがもたらす近東の政情不安、東南アジア圏からの経済攻勢に対する南アジア諸国の緊縛を訴えるのは経済的連携とその組織化以外にない。南アジア経済圏は、近東の政情不安定化に伴ってインド以外、逼迫している。経済を盾として政治戦略を包摂した連携共同体となり得る。経済政策の安定のみが南アジアの平和を保障する。

経済的連携が政治状況の楯になる、という発想は参加各国のメディアにも好感を持って伝えられた。とはいえ唯一経済発展を続けるインドでさえ70パーセント以上の専業人口を抱える農業国でネパール、パキスタン、バングラデッシュ、スリランカも同様だ。

農業国家間にどのような経済連携が可能なのか。先端技術産業、食品加工産業が先行するインド主導の一方的な経済圏になってしまわないか。といった危惧は当然、周辺諸国にある。一方では、企業間交流あるいは提携事業化、越境雇用の促進などに大きな期待もある。

先走った経済学者は統一通貨構想まで提案している。あながち机上の空論ではなくルピーを単位とする国が多数の南アジア圏では経済価値が近似してくれば充分に可能であり、足並みが乱れなければ案外早い時期に対象化されるだろう。

首脳会議後、各国は活発な個別交渉をはじめた。どのような形で発効にこぎつけるのかは明確ではないが、インドを軸に事務レベルの折衝が繰り返されている。

インドは首脳会議の成果を受けて中国と個別に自由貿易協定を締結すべく動き出

した。双方に異論はなく先端機器などハード輸入への期待が高まっている。インドは過去十数年間に成功し貯えた農業政策を維持しながらソフト開発を推進する立場から工業製品の確保に中国を恃んでいる。

インドの国家政策として工業化、ハード産品の製作を開発する企図は希薄だ。農業立国を第一義として先端技術のサービス部門ソフトにおける総生産の飛躍を望んでいる。

農業立国を内政課題としなければインドは成り立たない。農業を支えるのは多数派ヒンドゥ教共同体だからだ。土地所有階層は伝統的にヒンドゥなのである。

そして土地所有階層ではないイスラム、キリスト教徒などの多種共同体社会と多数派ヒンドゥとの均衡を図らなければならない。少数派であるイスラム、クリスチャン、シックゥなどの宗教共同体は二次、三次産業に従事せざるを得ない。こうした状態を積極化する人的資源の開発、教育改革をより推進し多国間企業への参画を推進する。人的資源を社会資本化し総生産の拡大につなげるという政策だ。少数派、クリスチャンはもともと子弟の教育に熱心だったが、近年、ようやくイスラム社会も高等専門教育に子弟を送り込んでいる。先端技術産業への参画もめざましく拡大している。

周辺諸国との自由で安全な経済環境の樹立は政治と経済の戦略を共立させる。南アジア諸国が環となった聖域を形成することになる。アラブ、パレスチナ問題は連動したグローバル（地球規模）な問題である。インドとって南アジア自由貿易協定は対米、対イスラエルへの政治戦略として親米を基盤としつつ南アジア経済を基礎に敷いた安全保障同盟でもあるのだ。

結果としては03年後半からのインドの動向はすべて04年1月初頭の南アジアサミットに向かっていた。

第２章　インドと南西アジア周辺国

1　スリランカ　復興とインド

ゲリラ・タミール解放の虎（LTTE）とインド

ベンガル湾、インド洋が交差する洋上の島国スリランカはインド南端を巡ってアラビア海、ペルシャ湾に赴く航路上にある。

古代から先住するシンハラ族と後に移住してきたタミール族が混交している。圧倒的多数派であるシンハラは主として仏教、タミール族はヒンドゥ教徒である。底辺には民俗信仰が分厚い層を形成していて仏教もヒンドゥも民俗と習合している。ドラヴィダ系タミール族は20パーセントほどの少数派で南部インドに親近性を持っている。

1970年代、第三次印パ戦争後バングラデッシュの独立、シッキム王国の併合、南インド、ゴア特別区のイギリスからの返還などインドナショナリズムの強大化に呼応して、少数派タミール族はスリランカからの分離独立を唱える。当時、インドからの非合法な扇動、支援があったといわれている。タミール族独立運動から生まれたのが「タミール解放の虎　(LTTE)」である。LTTEはたちまち先鋭化し、本来は南部沿岸に居住していたのだが、非合法活動、ゲリラの拠点をキャンディ、ヌワラエリアなどの中央山岳地帯に求めた。

ゲリラ、テロ活動はインドとも齟齬をきたし80年代にはたびたび南インド湾岸にまで攻撃の手を伸ばした。インドはスリランカ沿岸に警備軍を派遣、常駐していた。

スリランカ復興国際会議

90年代に入るとスリランカ中央政府はノルウェーに和平仲介を依頼し、やがてインドも一切の関与を断った。

2000年代に入って、しかしゲリラはますます攻勢になっていった。中央山岳地帯の国道を封鎖しゲリラ支配地が出現するに至って、強硬だった政府もLTTEを組織として承認し和平交渉のテーブルに就くことを認めた。

02年、ゲリラによる国内の荒廃を復興するという国際準備会議が提唱された。スリランカへの海外援助を供与しようということだ。03年1月、パリで準備会議は開催された。川口外相がスリランカ、インド訪問を経て出席している。3月、復興国際会議は日本の箱根で開かれた。LTTEもテーブルに就いた。

復興と政治経済

復興会議の成立にはイラク進攻を目前にしたアメリカによる背後からの導きがあった。スリランカの地政的要件、インド洋からアラビア海、ペルシャ湾に至る航路は派遣艦船の要路なのである。コロンボ、ゴールなどの港は寄港地として安全が確保されていなければならない。アフガン戦争を経て、アメリカは日本、韓国、フィリピン、タイなど東南アジア諸国の援軍を恃む強い意図があった。

LTTEは箱根会議の後、合法的政治活動から再び脱落する。タミール族の処遇に不満を持ったのだ。自治区や解放区を樹立し国際援助を自営したいという要求は受け入れられなかった。また、政府内閣は親米政策を推進している。LTTEは米国の関与には敏感に反応し警戒を解かない。

米国に傾く内閣に対して大統領府も異議を唱えている。首相以下の内閣と大統領は、03年6月以降、深刻な対立状態に入る。

11月、首相がアメリカ訪問の留守中、大統領は準戒厳令を敷き首相を罷免した。しかし政変は3日間で終息した。アメリカから帰国した首相の説得に大統領が折れたのだ。

大統領は米国の後ろ盾をちらつかせながらLTTEに寛容な首相と内閣を受け容れることができない。穏健タミール族を擁する内閣とシンハラ・ナショナリズムの大統領の対立なのだ。

インドは大統領、首相の双方を条件つきながら容認している。南アジア首脳会議の経済路線に積極的な参画をしたスリランカは、近未来、インドとの関係緊密化をどのように構築していくかが鍵になる。

国際支援の大きな部分を負担する日本は、どのように参画し、その援助がどのように消費されていくか、注目していかなればならない。

2　ネパール　内戦からの10余年

議会制と王政

立憲君主制のネパールは二院制の議会を持っている。1990年代初頭、新憲法発布とともに激しい内乱の末、獲得した政治制度である。

大国中国とインドにはさまれたネパールは常に亜大陸の一部分として歴史を刻んできた。インドの動向に同伴してきた。釈迦の生まれた地であり民衆仏教が多数派であるが、王室がインドと縁戚関係を持った中近世からヒンドゥ教宗旨国でもある。民俗信仰が混交して国民の生活を支えている。

王室政治に異議を唱えた政党運動が90年代の内戦（civil war）を招いた。インドの影響を受けたネパール・コングレス（ネパール統一会議派）が与党になり、現在も連立の中心にいる。

議会政治に参画する共産党、人民党、労働党のなかからより過激な毛沢東主義派が非合法活動に走った。いわゆるマオイストである。96年頃から山岳地域に拠点化した。当初は中国の支援を受けていたといわれている。その後はインドの反体制運動とも連携した。インド軍から流れ出た武器を使用しているという噂もある。

マオイストと麻薬

2001年6月、ネパールのニュースが世界を駆けた。王宮クーテーターだった。若い王子とその一族が殺害された。真相はいまも判然としていない。しかし非合法軍団マオイストが実行部隊としてテロに加わったというのは確度の高い情報だ。マオイストは事件後、新王に対して組織の承認を求めた。一度は交渉のテーブルに就いたが、結局決裂した。彼らが王宮クーデターに関与していたとすれば汚い仕事に手を出したということになる。王政を否定し革命を標榜するものたちが新王の椅子を保証してしまったことになる。

アフガン戦後、北部の芥子畑をアメリカは焼き払った。反米集団の資金源になることを嫌ったのだ。インドではその後、麻薬のソースはネパールに移った、と噂された。ネパール人が摘発されてもいる。タイ、ミャンマー北部とネパールが生産地だという。

事実、カトマンドゥやポカラの夕暮れ、8時を過ぎると路地などでは必ず声をかけ

られる。十代前半の少年か学生風の若者だ。山間郡部からでてくるマオイストだと人びとはいう。

麻薬を資金源にしているとしたら組織は西アジア、東南アジアに連携しているのだろうか。ネパール・マオイストとインドをはじめパキスタン、アフガン、イラク、そしてパレスチナのテロ、ゲリラの相違は宗教コミュニティにある。仏教とヒンドゥの混交したネパールは日本人の宗教感性に似てより信仰心が深い。マオイストは原則的に無宗教である。が、中国や旧ソヴィエトのコミュニストとも違って地域の民俗宗教には理解を示している。彼らがイスラム過激派、原理主義と提携するのは容易いことではない。とはいえアメリカやインドの関与が働けばたちまち発火することは間違いない。現在、最も強力にマオイストを支援しているのはアメリカの石油企業だという説もある。かなり確かな情報だ。

マオイスト掃討作戦

04年3月21日、スペインでの列車テロやイスラエルのハマス幹部の連続暗殺に隠れて詳細は報道されずに終わったが、カトマンドゥ南西の小さな町でマオイスト500人が掃討された。国軍は戦闘ヘリコプター数機を派遣した。

翌日には残党50人が殺されている。相当規模の作戦が展開されたことになる。03年12月からはじまった学生ストが04年2月末、ようやく鎮静に向かった。マオイスト掃討作戦としては時期を得ていた。

ネパールの新聞にはマオイストの消息が出ない日はない。全土の山岳地帯で小規模な戦闘、テロが連日のようにある。学生ストにもマオイストが関与していると政府、治安当局はいっている。

反体制活動をすべてマオイストといっている傾向は否めない。ネパール政府のあいまいな規定が山間の人びとの隠れた支持に繋がっている。マオイストは人気があるのだ。

ネパールの政情

立憲君主制の元、国王は統合の象徴である。が、日本の政体と違うのは国王も政治に参与する余地があることだ。政党による内閣と王室は常に対立している。野党

も強く、連立内閣を脅かしている。この政情不安が学生スト、反政府活動を活発にさせている。

1950年代からの5ヵ年計画も第三次以降は機能しなくなり、海外援助に頼っている。80年代からは日本が第一位、インド、中国が続いている。ネパール人はインドが嫌いだ。100年以前、大英帝国によって「帝国」と称したインドはその領土を保全したまま、王国ネパールを併合したまま解放独立を企てた歴史を忘れられないのだ。にもかかわらずインドに頼らなければならない情況にネパールは苛立っている。

支援国日本は中国、インドを射程におきながら支援の内実に迫る関係を強化すべきときにある。支援が日本にどのような恩恵を与えるのか。支援は正当に消費されているのか。あまりにも跡付けのない、未来のない支援ではなかろうか。国連関与の開発事業など、日本の援助はすでに有名無実になっている現実もある。

南アジア経済圏の樹立に参画するネパールにあらたな関係を求めることが日本対中国、北朝鮮への発言権を保有することに連なる。

3　パキスタン　宿怨の対インド

氷解、印パ関係

すでに触れたようにパキスタンとインドは第二次世界大戦後の長い宿怨を解いてあらたな関係を築きつつあるかに見える。

パキスタン・ムシャラフ大統領は軍事クーデターによってその座を獲得した。やがて軍政から民政に移管、04年には軍人ムシャラフは軍服を脱ぐと宣言した。

1999年、カシミールを挟んで印パは緊張し、パキスタン正規軍はインド側カシミールに進攻した。第四次印パ戦争は実質的には発火していた。しかしムシャラフは緒戦で撤退し、インド軍が1500キロに及ぶ国境に張り付くままにした。

ムシャラフを止めたのはアフガンに駐留、作戦を進行していたアメリカだった。アフガンの次をスケジュール化しなければならないブッシュ政権にとって印パの流動は好ましいものでは到底なかったのだ。ムシャラフはアメリカを引き出したといえる。インドがソヴィエト崩壊後、ゆっくりと親米に傾くのを横目に睨みながら対米政策の時期を計っていた。

インドの動向を探り、追従ではないポリシーで親米の楔を打つことはパキスタン

の安全を確保することであった。リビア、シリア、ヨルダン、北朝鮮、そして中国との関係を保持しながらアメリカを引き寄せる、というのがムシャラフの課題だった。結果としてアメリカの経済制裁を解き、核開発に関する一切を不問とする条件を勝ち取った。04年に明らかになったパキスタン核開発の父カーンの自己暴露はリビアの戦略に対応しながら無傷に終わった。

9.11テロとアメリカのイラク進攻はインドに環南アジア連携を促した。ムシャラフは疲弊する経済を救済する道としてインドの提唱に乗じた。

印パ和解はムシャラフのしたたかな政治手腕によって開かれたのだ。

イスラムと軍部

イスラム教国パキスタンは西南アジア、中近東とおなじイスラム寺院モスクとそこに帰属する地縁共同体ウラマーによって社会がなりたっている。しかし、イランやアフガンのようにモスク共同体が即ムジャヒディーン（聖戦士）とならないのはパキスタン国家の成り立ちによる。

第二次大戦後、インドと分離独立したとき、パキスタン領内には多くのシックゥ教徒、ヒンドゥ、クリスチャンを抱えていた。イスラム教徒も主流派スンニだけでなくシーア派も現在に至っている。

特にシックゥ教徒はインドを凌いでいた。150年前、シックゥ戦争といわれるシックゥ独立運動があり、イギリスにたいして激しい戦闘を繰り返した。現在の印パにまたがるパンジャブ州、インドのグジャラート州を拠点にした。200万のシックゥが虐殺されたという悲惨な敗北の後、ほとんどがパキスタン側パンジャブの荒地に逃げ込み延命した。彼らはパキスタン独立後、庇護されて、政府の強い勧めに従ってイスラムに改宗した。

こうした他民族、他宗教が根底に混在するパキスタンでは、モスク共同体がそれぞれ異質の文化性を保持している。彼らが縁戚防衛軍を形成することは容易ではない。彼らの軍隊は徴兵を基礎にした近代組織でなければならなかった。軍政の生まれる素地があったのだ。シックゥはもともと軍人階層であったこともあり、軍隊には率先して参加した。

ムシャラフの和平策と軍部

ムシャラフの均衡外交を阻害する勢力は彼の出自である軍部だった。彼らにとってはインドと和解するなどまったく思慮のほかなのだ。

南アジア首脳会議の直前、03年12月下旬、ムシャラフはたびたびテロに会っている。一瞬の時間差で救われている。一部にはムシャラフ自身が仕組んだ謀略だという説もある。ムシャラフは連日、軍部と会談していた。その帰途に襲われている。軍服を脱ぐという宣言も軍部への強い意思表示であろう。

南アジア首脳会議の後、旬日を経ずにムシャラフはアフガンに閣僚を派遣している。復興事業に参画しようというのだ。大統領はいま、失政を許されない。経済政策が成功するか否かにパキスタンの命運がかかっている。

第３章 「南アジア首脳会議」以後のインド

1 インド・パキスタンの個別合意

04年初頭の南アジア首脳会議での印パ個別会談では伝えられるような列車、長距離バスの相互乗り入れといった柔らかな話題だけではなかった。より深い合議が成立していた。

明らかにされなかった内容をさまざまな情報から推察すると、

1) 12月の停戦ライン確定ではカシミール域について棚上げになっていた。カシミールは停戦ラインを確定できずに休戦状態だった。印パ両地域カシミールでは停戦後も連日、テロ、ゲリラの攻勢が続いていた。両国首脳にとってカシミール活動家集団はすでに負担になっていた。

   個別会談では支援とおぼしき行動を一切取らない、という合意がなされた。

2) また、アフガン、パキスタン国境山岳地域に潜伏しているといわれるアルカイダとその同種集団を庇護、温存しない。

   従来、パキスタンはイスラム過激派を育成、あるいは支援してきたといわれてきた。パキスタン側カシミールはその温床と目されてきた。パキスタンはそうした周辺国からの概念規定を払拭しなければならない。

   パキスタンはアメリカによる掃討作戦に協力する。インドはカシミール、ウットラプラデッシュ、アンドラプラデッシュ各州の彼らと連携、援助する非合法活動集団を封殺、拘束する。

以上の二項は、04年1月、インド、シュリナガール周辺地域でのカシミール反政府集団を攻撃し主要集団を殲滅したことに反映されている。また2月、アフガン駐留のアメリカ軍によるアルカイダ掃討作戦にパキスタン政府警備軍が先導したことによって証左された。

2 南西アジアとアラブを結ぶ少数民族

印パ政府のこうした姿勢は両国の緊密化を見せしめ、米中に印パ和平を認識させ

ることには有効だった。しかし現在に至ってもやや小康状態ではあるがカシミールではゲリラは終息していない。また、2月、世界中に流れたウサマ・ビン＝ラディン拘束は誤報だった。

カシミールの根本的な解決は、印パ中の三国が分離占有している特殊性を見直し地域民族、宗教社会に根ざした統治システム（制度）を樹立すること以外にない。氏姓親族を基礎にモスク（イスラム寺院）共同体（ウラマー）が支える社会に適合した民主主義を提起しなければならない。モスク・ウラマーがしばしば武装自警組織を持つのである。

アルカイダ、ならびに反体制ゲリラ、テロ組織の掃討はウサマ・ビン＝ラディン追討作戦だけで全うされるものではない。パキスタン・アフガン国境地帯で鍛えられた集団は旅団となって山岳地帯に潜伏し、国境を容易に越えている。アルカイダ自体はすでに液状化した後、世界規模の伏流となって実態を隠している。核となる実態を失っている、といった方が正しい。もはやアルカイダに国際テロ組織といった命名はふさわしくない。

そもそもアルカイダがアフガンで勢力を持ったのは米ソの拮抗によってイスラム原理主義権力が鬼っ子のように生れでたことにある。ビン＝ラディンとそのブレーンはアフガン出身者たちではなくサウジアラビアに出自を持っている。彼らはもともと旅団なのだ。にもかかわらず山岳少数民族は彼らの潜伏を許している。実は隠匿さえしているのだ。なぜ？

パキスタン・アフガン国境地帯の少数民族は一部の山間農業地帯を除いて多くは遊牧畜が生業である。彼らは日常的に山間国境を行き来して生活している。彼らの生業は国家の枠を日常的に越えてなりたっている。彼らが最も恐れるのは彼らの生活様式を失うことにある。時代の要請によって失うのなら、それに替るよりよい条件が与えられるべきだ。そんな兆候はない。彼らは時代に取り残されたように見えるのだが実は世界を見つめている。よく知っている。アフガン新政権やパキスタン政府が異教徒ユダヤ教やキリスト教に引きずられていることを・・・・。イスラムとはいってもけして過激になることはなく、氏族の結束を最も大切にしつつ他の少数民族と協調しながら山岳荒地に生きてきた。彼らは禁欲的なイスラム戦士たちに寄り添うことはできても米兵と行動を共にするアフガン新政権やパキスタン軍に道

を明けることはない。

3 アフガニスタン、パキスタン、インドとアメリカ

アフガン・パキスタン・インドの政権を担う人物たちはこうした背景を知悉している。カシミールが印パの合意通りのプログラムで解決しないだろうことは双方の権力者たちにとって自明のことなのだ。

アフガン・パキスタン国境地域のアルカイダ掃討ローラー作戦も同様だ。少数民族地域に展開される作戦のガイドはパキスタン、アフガンの兵士だ。彼らが収集してくる情報源はビン＝ラディンとその一党を匿っている少数民族の村落住民なのだ。成功するはずがない。

03年末から04年にかけてアフガン、パキスタン、インドの三国に成立した軍事作戦は米国の支配下、あるいは親米に政略を求めた結果なのである。

中国との関係強化を保険としながら親米路線を保つ、これが印パ、ムシャラフ大統領とバジペイ首相の合意した政治戦略だ。アフガン、イラク、そしてイスラエルを遠望するアメリカの戦略は印パ、アフガンにとって高い障壁だ。その壁に立ち向かうことができるのは経済政策以外にない。すでに述べたように成長を続けるインドと協調し疲弊した経済を救いだすことが民政を安定し軍部の不満を沈めることになるというのがムシャラフ大統領の決意だった。

それにしてもビン＝ラディンとその一党は拘束されるのだろうか。当初、米軍の作戦が開始された頃には6月頃に逮捕、という情報があった。アメリカの大統領選挙を睨んで、アフガン・パキスタンで合意ができた、というのである。所在はつかんでいるということだ。

しかしごく最近、4月中旬、インドに流れてきた情報では、パキスタン側はすでに作戦を放棄したということだ。アメリカのイラク作戦が捗っていないことを見据えたパキスタン、アフガンの対応であろう。加えてすでにビン＝ラディン拘束が何の政略的意味を持たないということもある。

4 二極化する世界

04年2月になると世界はめまぐるしく展開し、収集した資料は一週間単位で更新

しなければ対応できない情況になった。

スペインでの列車テロ、イスラエルでのハマス幹部連続暗殺、ネパール・マオイスト掃討、米、多国籍軍のイラク作戦停滞と情況は流動し続けている。4月末にはシリア、タイでもテロだ。

世界ははっきりと二極化してきた。ターゲットがソフトかハードか、という議論は問題意識を的確にはしないだろう。イラクでイタリア人が人質になり銃殺された。民間人とはいえアメリカの軍事産業に従事する人物だった。ハードなのだ。実は戦争にハードもソフトもない。どんな戦場でも兵士より「ソフト」な人びとこそ悲惨にさらされるのだ。

二極の一方は強大化したアメリカだ。追従するイギリス、背後のイスラエルも極地だ。もう一方はしかし国家や地域として特定できない。ナショナリズムを超えた異教徒の社会だ。

20世紀後半、あらゆる宗教が衰弱し堕落するなかでイスラムだけが膨張した。第一次、二次大戦を経て世界宗教は連環性を失い、人間の生死、類縁性、社会と共同体への展望を授けることができなくなっていた。イスラムだけが世界を貫く価値観を発揮してきた。アメリカの対極にはイスラムの社会が立ちはだかっている。アメリカのグローバリズム、アメリカのスタンダード、アメリカの民主主義と政治力学は彼らの前では価値を持たないのだ。そもそも対ソヴィエトに腐心するあまりアメリカ自身がこの妖怪を育んでしまった。1970年代から80年代の陥穽だった。

この敵は見えにくく国境のない捉えどころのない敵なのだ。液状化し伏流となって地表の下を這っている。アメリカは非キリスト社会、アジアそのものを敵に見立ててしまったのだ。もはや世界戦争といえる。

5　国連は情況を救えるか

アメリカはイラクの基本法に基づく暫定統治を国連に託す表明した。これは危険な策だ。

イラクは国連を信頼していない。フセイン政権下であったとはいえ過去の長期に渉る制裁措置やその後の石油、食糧交換支援でもとかく不正の噂があった。最近、国連内部でも調査を開始している。核査察、大量破壊兵器調査も不明確なままだっ

た。昨年のバグダッド国連本部の爆破にもそうした背景がある。インド、パキスタンも同様に国連への信頼はない。周辺国が賛同しない国連統治は困難な情況を現出するだけだ。イラクの抵抗勢力はアメリカが弱体化し国連に投げた、と受け取るに違いない。

6　6月の先進国首脳会議での大中東構想

6月にアメリカのジョージア州で先進国首脳会議が開かれる。アメリカは「大中東構想」を発議するという。いよいよアメリカの戦略が明確化する。日本に要求されるのは経済支援だ。注目しなければならないのは支援の対象国だ。アメリカの中東構想とは、石油利権、イスラエル・パレスチナ処分、南西アジア対応などだ。イランへの侵攻はイラクでの実質的な敗退によって後退してしまったが、イスラム社会への脅威は拭いさられてはいない。ブッシュを支えるネオ・コンサヴァティブの腰が伸びきってきた現在、どのような「構想」が発せられるか注目に値する。

7　提言：日本はどうする

アセアン（ASEAN）と南アジア（SAARC）

第二次大戦後、日本は米国と同伴する国家像を、特にアジア諸国に印象づけてきた。敗戦国から経済復興を遂げる過程でASEAN諸国は日本を無視できない重要な国と認識した。ASEAN首脳会議は1960年代、日本、中国を除いた諸国で設立された。やがて日本の参画を要請し、中国もオブザーブする存在になっている。本報告で見てきたように南アジア諸国が中国に次いでアジアの経済基盤を獲得しつつある現在、日本は緊密な対応を迫られている。ASEANとSAARCは隣接している。外務、経済関連省庁は政策戦略を日本独自なアジア戦略の開発に赴かなければならない。従来、日米路線からアジアとの関係を路線化する方式が日本政府の方針だった。本報告書にあるスリランカ復興、インドへの経済支援停止解除もアメリカとの連携を読み取ることができる。SAARC諸国は日本独自な政策として受け取っている、あるいは受け取るべきと政治的解釈を忖度している。

経済は民間活力によって政府政策を超える活動がある。経済が政治を先導することも可能だ。アジアの日本を発揮するアジア重視の体制を構築するためには外務省

の機構自体から改編が望まれる。SAARC、ASEAN、東アジアをブロック化し対応できる強力な部局の設立が急務である。

東アジア諸国、中国、韓国との過去の歴史にまつわる政治的負の遺産もアメリカを介在した氷解ではなくアジア諸国を恃む指針を獲得すべきだ。

北朝鮮問題も、ASEAN、SAARCの共有課題とすべき時がきている。アジアは大欧州機構と拮抗する位置に成長しつつある。

日本は米国製グローバル・スタンダードからアジアン・スタンダードにシフトすべき季節を迎えている。アメリカとの協調を放擲することではなくアメリカに対してアジアの一国としての立場を明確にすることなのだ。

中東、南アジア情勢と日本

イラクでの日本人人質事件から再び自衛隊派遣の是非が論議になっている。奇妙なことだが日本の現実だ。自衛隊派遣については法整備上の曖昧さや過剰なアメリカ追従など問題点はある。しかし控え目に率直な声を報告すると、アジアの諸国では東アジアのヒステリックな日本の軍備への危惧論ばかりではない（参照:「日本人のちから6号」04年3月・拙稿)。インドやネパール、スリランカでは安堵感を以って迎えている。日本が特殊な国ではなく現実の世界に生き、その罪と罰を共有するのだと受け取っている。

日本は戦後社会をアメリカとともにアメリカに従って生き延びてきた。いま、アフガンやイラクは日本の戦後とはまったく違った価値観で占領体制を迎えている。日本はアメリカの占領政策を受け容れるにあたって、国体護持を最終の目的として固守した。いま、アフガンやイラクは国家としての国体、国風の社会を失う危惧を怒りとともに抱えている。イラクに共感を持つパキスタン、イラン、アフガン、インドネシア、パレスチナ、一部アフリカなどイスラム教国とその地域は、すでに述べたように世界を二極化しつつある。日本は、国体と社会を死守した経験をもつ唯一の国なのである。イラクや南アジア諸国が日本に親近感を抱くのは核被害国であることより、本質は国民性を失わなかったことへの尊敬があるのだ。紛争国に対してこれを正しく伝えていかなければならない。

自衛隊の復興支援派遣はこれからが本来の活動を問われている。国連移譲などに

よる日本国内の公式手続きなど煩雑ではあるが、継続することが望まれているのはゆるぎない事実だ。

支援活動を継続するために、防衛庁は、外務省はもとより文部科学省、経済関連省庁、民間研究者、団体を糾合してイスラム社会の経済、文化、その実態を掌握する機関を設立し活動を協働すべきだ。

防衛庁はすでに東チモールなどで支援活動を経験している。が、国民は自衛隊による支援活動がその後の日本の経済活動に密接に結びついていることを知らない。政府は和平政策と経済活動について積極的に解明、説明すべきである。スリランカをはじめ、アフガン、パキスタン、インドへの経済支援再開も和平を条件にしていることを周知させなければならない。明らかにするフォーラムでは日本の外交方針自体が問われることになるだろう。対米関係と日本／アジアは国民的議論になるべきである。政府は時代が要請する議論を避けてはならない。国民、経済人、研究者は真摯に参画すべきである。憲法論議と同義な議論なのである。

アメリカに率直なアジアからの発言を確保しよいアメリカ像を合意する日本でありたい。04年は外交政策が発揮できる季節になるだろう。

参考文献一覧

National Security : Military Aspect. Foreword by Brajesh MISHRA. Rupa in Delhi.

The Forgotten Army. By Peter Ward FAY. Rupa in Delhi.

Commanders of The Muslim Army. By Mahmood A.GHADANFAR.

Darussalam in Riyadh,Saudi Arabia.

Understanding The Maoist Movement of Nepal. By Deepak THAPA..

Centre for social research and Development in Kathmandu,Nepal

Maoist in The land of Buddha. By Prakash A.RAJ. Nirala Publication in Delhi.

A Kingdom Under Siege : Nepal's Maoist Insurgency, 1996 to 2003.

By Deepak THAPA. The Print House in Kathmandu.

Society and Politics in India. By Andre BETEILLE. Oxford in London.

付録1　調査記録

George FERNANDES　ジョージ・フェルナンデス

インタビュー調査「防衛大臣 FERNANDES の人物像」

Harsha D'souza (42)　25.May

マンガロール出身・在住　保険調査員・市民運動家

FERNANDES とおなじカソリックコミュニティ。社会運動家としての FERNANDES に関心を寄せている。80 年代、彼のマンガロール訪問に際し特に望まれて面談している。世代を超えて広い視点から FERNANDES を語る適任者。

Prabhakar GHATE (74)　25.27.May

労働運動家・元 BMS Bhatha Mazdor Sangha インド総同盟事務局長

マンガロール出身のブラーミンながら若くして労働運動に身を挺す。家系は一世紀前頃マハラシュトラからの移住者と見られる。

一方で十代の頃から RSS ヒンドゥ者会議に参画。BJP インド人民党支持。

インド総同盟事務局長（現在は顧問）として労働運動のなかで FERNSNDES に接触。1980 ～ 90, V. P. Sighn 内閣の頃で FERNANDES はすでに政界にあり大臣だった。単産組合 Trade Union に関する調整者としてたびたび接触。官邸はオープンで気さくに招き入れた。人物像は語るが政治的発言は控える。

Mahabala RAI　(83)　27.May.

元ジャーナリスト、社会運動家（労働運動）　マンガロール出身、バンツ・コミュニティ。

ベナレス・ヒンドゥ大学卒業後、ジャーナリストであった 1940 年代から自由主義・民族主義の立場から対イギリス抵抗運動に関わる。そもそもはベナレス大学当時、学生運動に投じ、第二次大戦中の対英デモに参加、以後の進路を決定する。当時、国家警察ならびにアイルランド兵士と対峙する。アイリッシュはイギリスには複雑な感情を抱いており、デモの後など、一緒に茶を飲んだりした。

1977 年、すでに組合運動に挺身していた頃、ようやく Congress 政権を倒し

Janantha 党内閣の成立とともに大臣となった FERNANDES と対面、たびたび交渉を持つ。

Janantha 党支持者である。

70 年代の非常事態宣言の頃、政府に追われた氏は地下へ潜伏、学生だった長子が拘束されるという事態にまで至った。

80 年代半ば、故郷マンガロールに戻り社会運動に従事。現在は引退。

高齢ながら矍鑠として、往時の活躍がしのばれる老闘士である。

上記 3 名が語る Gorge FERNANDES：

1. マンガロール出身、カソリックの家系に生まれる。十代でバンガロール修道学校へ入校。修道士教育を受ける。しかしその教育に疑問を持ち、社会運動を志してボンベイ（ムンバイ）に転じ、労働運動に参画。BALAPPA ならびに RAM NHOHAL の影響とおもわれる。
2. 弁舌巧み（現在では 7 国・地域語ができるといわれている）で組織能力に非凡な才覚を発揮して頭角を現す（1948,49 年頃）。
   運輸単産（タクシー労働者）組織化を果たす。71 年、全国鉄道労組による三日間の鉄道ゼネストを組織する。
3. ドイツ労働運動と接触し、AMEMBER BHARATHA ヒンドゥインド同盟として資金援助も受けた、といわれている。欧州型労働運動を指向した。
   また、後にはアメリカの CIA とも結んで資金調達をしたといわれている。
4. ここで 76~77 年、インディラ・ガンディ政権の終末期、8 ヶ月にわたる非常事態宣言のもと大規模な地下闘争を勝ち取る。この頃、インディラ・ガンディ、コングレス政権に対抗、バローダでの橋梁爆破闘争を指導したといわれている。
9. つねに CONGRESS コングレス・インド統一会議派に抵抗し、インディラ・ガンディ、ラジヴ・ガンディ政権に挑戦していた。党派 SAMATHA Party を結成。現政権アタル・B・バジペイ首相も当初参加していた。現在も党首として少数派だが連立政権の一角を担っている。
   カルナータカ州政府は現在、首相 S.M. クリシュナ内閣でコングレスである。

伝統的にカルナータカはコングレスが強い。こうした情況からFERNANDESと故郷かルナータカの関係はよくない。が、カルナータカの人びとの彼への支持は強い。

10. 80年代、ムンバイから北インド、ビハールに拠点を移し産別労組（Trade Union）の組織化を指導。多くの支持を得る。現在の選挙区である。ナーランダ大学学生、識者を組織、講師も務める。

    遅い結婚を果たす（50代後半）。相手はビハール出身、義母はヒンドゥ、義父はイスラム教徒。現在、子息の存在が知られている。

11. 03年5月24日、バジペイ政権の内閣改造が発表された。北インド情勢に鑑み、西ベンガル、ウットラプラデッシュ州選挙との兼ね合いで行われたという。ここでもFERNANDESは影響なく座を保っている。連立内閣のなかで彼のSamatha党の存在を無視できないのだ。と同時に親米に傾いた現政権の国際的役割と防衛が、彼の手腕を恃んでいることを物語っている。

    現内閣では副首相のアドヴァニが強烈なヒンドゥ民族主義者であり、彼の対極にある。そのバランスシートが首相を援けている。

付録2　インド最前線 '03～04

インド最前線 '03～04

The actual INDIA

第1回　国境のない戦線（03年9月29日）

ライブ・インド

『インド滞在記』と題して昨年から今年3月まで連載されたこのページが、装いを改めて登場することになった。

今月から来年3月までを一区切りとして、月2回掲載になる。

筆者は南インド、アラビア海沿岸に常駐して定点観測に身をおいている。ここから現実の今、最前線のナマのインドを伝えようとおもっている。当然、周辺諸国、スリランカ、ネパール、パキスタン、そして中東の動向を視野におさめていく。時には事件を、時にはキーマンとなる人物像を、とインドから観た世界を伝える。

めざましく発展するＩＴ産業は世界をリードし、農業政策は11億の民を養い飢餓を放逐した。対外戦略では緊張する周辺諸国に囲まれて、親米を軸に独自な道を日々、選択している。

新しいインドの動静は常に古いインドと交錯し、ことごとにサイクロン（大竜巻）を巻き起こしているように見える。そこには基層に深く横たわる文化、多様な価値観がある。インドを理解しにくい国にしている一因である。解きほぐして、実態に迫るレポートを掲載していきたい。

インドの国境

インド亜大陸は海と山岳地帯に国境を持っている。

北部山岳地帯は、バングラデッシュ、ネパール、ブータン、ミャンマー、中国、パキスタンと接している。国境が安定しているのはネパール、ブータン、ミャンマーの3国だけで、中国とは30年に及ぶ紛争中であり、パキスタンとは緊張関係が緩んだことはない。

南部海洋にはスリランカがある。たびたびインド沿岸を攻撃したゲリラ組織「スリランカ・解放の虎（LTTE）」とスリランカ政府の停戦合意が02年に成立した。そ

れにともなってインド・スリランカも同年、20年ぶりに和解した。ただちにスリランカ復興支援国会議が組織され日本も加わって03年1月、コロンボで開かれた。続いて同年3月、スリランカ和平会議が日本の箱根でLTTEも参加して開かれている。

イラク情勢とインド

アメリカがイラク攻撃に関して勝利宣言をして以後、5月中旬頃からインド第二の都市ムンバイを中心に散発的に爆弾テロが発生している。

8月25日、観光スポットであるインド門の青空駐車場で爆発が起こった。50名以上の犠牲者が出た。翌日、副首相アドヴァニはパキスタンからの流入テロリストの犯行だと断定した。

最近になって、つぎつぎと検束された犯人たちが、どうやら流入者ではなくアラブ中東諸国からの帰還インド人であることがわかってきた。インドの内と外は単純にナショナリズムでは語りきれない。9.11以降の戦争、国境のないテロとゲリラの時代を象徴している。

インド最前線 '03〜04
The actual INDIA (03年10月13日)
第2回　インドにとってのアセアン首脳会議

バリ発アセアン首脳会議

インドネシア、バリ島のヌサ・ドゥアで10月7、8日の二日間、アセアン首脳会議が開かれた。日本からも小泉首相、川口外相が参加したとインドへも伝えられた。

インドのアセアン首脳会議への参加は昨年のシンガポール会議からだ。

バリは昨年10月の爆弾テロから一年、それ以後もインドネシア各地でテロが散発しており焦点地域のひとつである。インドネシアもイスラム教が多数派の国なのだ。会議の主要課題は、政治戦略の局面ではテロリズムへの取り組み、経済問題は中国を中心としたアジア経済圏、特に中国元の切り上げ問題への討議などがおこなわれた。逐次、日本にも伝えられたことだろう。

インド各紙は参加したバジペイ首相と中国との個別会議での注目記事を掲載している。各紙、かなり大きな扱いだ。

中国にとっての北東インド、シッキム州

「中国、シッキムの国家表記を外す」というタイトル・リードで一見、日本人にはなんのことかわからないだろう。しかしこれがインドではトピックなのだ。

シッキム州は中国チベットに国境を接するインド東北端の地域だ。ヒマラヤ山脈の東端に位置してネパール、ブータンとも接している。

中世からシッキム王国として栄え近世にはイギリスの入植を許した。やがてインド独立、東西パキスタンの分離独立という歴史の流れのなかで、1970年代初頭、旧西パキスタン、バングラデッシュ建国の時期をともにしてインドに併合、シッキム州となった。

ところが中国はこの併合を認めていなかった。中国の地図ではシッキムは王国のままだったのだ。それがバリでのアセアン首脳会議の中印会談で中国側から報告され、中国政府の公式ウェブサイトでもシッキムはインド領内になったというのであ

る。

今年6月、インド首相として始めてバジペイが北京を訪問した。そのときにもこの問題は議論されている。中国は良好な感触をバジペイに与えたのだが、8月中旬、中国がヒマラヤ国境域でインド警備兵数十名を拘束したと伝えられた。拘束は10日以上に及んだ。一触即発の危機だった。バリ会議での中国の公式報告はインドにとって大きな出来事なのだ。

ここまで記したところへ大ニュースが飛び込んできた。

緊張するネパール

ネパール共産党毛沢東主義派が過去最大の戦闘をおこなった、という最新情報だ。ネパールの首都カトマンドゥから415キロ、西部ネパールのカース・クスム村で10月10日夜から11日朝まで警官隊と交戦した。毛派の死者50人が確認されている。ネパールラジオは鎮圧隊を含めて死者125人を数えると伝えている。

ネパールの過去2年の緊迫については昨年度のこのページ「インド滞在記・シッキムの憂鬱」などに書き記したので参照されることを望む。

中国に接する国境地帯は、経済的にも戦略的にもバリでのアセアンが示すようにインドを軽視できなくなった。こうした現況のなかで中印がどのような道を選択するか、ネパール、バングラデッシュなどの周辺国の情勢を含めて日本は注目していかなければならない。

実は筆者はネパールに潜入すべくデリーに滞在して機をうかがっていた。周囲の研究者や旅行代理店の誰もが、いまはやめたほうがよい、きな臭いよ、と忠告してくれていた。沈静化を待って必ず赴くつもりだ。続報を期待すべし、と結ぶ。

インド最前線 '03〜04

The actual INDIA (03年11月3日)

第3回　断食月・ラマダンのインド

断食月、死と再生

10月最終週、イスラム教徒ムスリムは断食（ラマダン）に入った。

例年、各国各地域でラマダン入りの日は少しずつずれている。今年、インドは10月27日だった。イスラム暦、正しくはヒジュラ暦の第九月が断食月になる。太陽暦にあてるのだがどうしても地域格差ができるらしい。

ラマダン、断食月は預言者ムハムンド（マホメット）が洞窟に籠った折、神の啓示を受けコーランを誦することになった伝えによるものだ。

ラマダンになるとムスリムたちはそれぞれの教区モスクに普段より足繁く通って日に五回の礼拝を勤める。街ではアラビック料理の店は長期休暇に入ってしまう。羊肉や酒類の販売店も多くは閉まる。性生活の禁忌もある。

信仰者たちは預言者の籠りに似て聖なるひと月を過ごすのだ。日常性を越えた籠りの日々は聖なる次元の生活に喩えられ、ひと月を経て再生する。日本の修験道で霊妙の山岳に身をゆだねて、死と再生の修練とするのに似通っている。

このラマダンが政治や経済に大きな影響をもたらすのだ。

バグダッドは燃えている

ラマダンに入る前後からイラクのゲリラ、テロリズムは活発になってきた。遂に赤十字までが襲われた。国連事務所は撤退に追い込まれた。

アメリカ政府筋や一部のジャーナリズムはシリアからの流入テロリストの犯行といっている。インドの各紙はその説に疑いながらも従っている、というのが実情だ。明確な情報を持てない苛立ちとイラクの現状況への認識が違うのではという懼れにも似た感覚が背後にある。

インドの歴史上、かつてない親米政権である現内閣はイラク派兵の要請に応じていない。アメリカが方針を転換して多国統治支援を提案した最近の要請にも応じな

いのだ。隣接する宿敵パキスタンも応じていない。

このゲリラ、テロを含めた戦争が国境をはさんだ戦線で闘うものではない、というのが理由のひとつだ。戦線なき闘いは、何時、国境内に波及するかわからない。

19 世紀末にイギリスによる「帝国インド」となって以来、曲折はありながらナショナリズムを育んできた。しかし現在の中東、南アジアはそのナショナリズム自体が崩壊する危険を孕んでいる、という苛立ちがインドにはある。テロリストたちに国境はない。アメリカの要請に乗って派兵できる状態ではないのだ。

そしてもうひとつはラマダンだ。ムスリムたちが自己と社会を最も純化する季節であるラマダンはそっとしておくべき時なのだ。アメリカの国連や各国に呼びかける戦略はムスリムの命がけの反攻を導きだすのだ。そういう季節だ。

テロリズムにスタンダードはない

実は筆者は、デリーに滞在して取材していたのだがパキスタン入国がうまくはかどらず、南インド、マンガロールへ帰ってきた。あまりの気温差に風邪を背負い、熱発してしまった。この原稿送付が遅れた。そして大事件を報告することになった。

日本にも伝えられているだろうが、2 日、米軍の輸送ヘリコプターが撃墜された。

撃墜された 2 機には 50 人の本国へ帰還する米兵が乗っていたという。

深夜の BBC は北部イラクで石油パイプラインが爆破されたと速報した。詳細は分からない。しかしパイプラインに手が伸びたということは単なるテロではない戦略的意図を読み取らざるを得ない。続報を注視する。

ベトナムの泥沼ゲリラ戦とおなじ様相を呈してきた。アメリカは5ヵ月前に終結したと宣言した大規模戦闘作戦を再開する以外、道はないだろう。

イラク、いや中東、南アジアの非キリスト教地域にグローバル・スタンダードは通用しないということを目の当たり見せつけている。

インド最前線 '03～04
The actual INDIA (03年11月14日)
第4回　スリランカの和平

インドとスリランカ

インド東沿岸、ベンガル湾とインド洋の境目に浮かぶ島国スリランカとインドは神話の昔からに憎悪と憐憫の歴史を刻んできた。

神話ラーマヤナでは猿神ハヌマンタがスリランカに幽閉された英雄ラーマの妻シータを救出するためにひと飛びした挿話で知られている。南インドタミール州からは本当に手が届きそうな位置にある。それだけに近親憎悪に似た卑近と一入のいとおしさが双方の国民感情にある。スリランカはインドから伝えられてインドではヒンドゥに圧倒されてしまった仏教を国是としている。律儀な小国でありながら当然、頑固な独立心を養ってきた。インドにしてみればパキスタンとは違った意味でドラヴィダ文化を共有する本来はインド、という意識が強固にある。

内戦の30年

スリランカは少数派タミール族と多数派シンハラ族で構成されている。タミール族の過激派は島内分離国家の樹立を意図してゲリラ戦をおこなってきた。1970年代後期から「タミール・イーラム解放の虎（LTTE)」はしばしば激しいテロ、ゲリラを展開してきた。80年代から90年代初頭にはインド、タミール州沿岸にまで襲撃の手を延ばし、インド国軍がスリランカに進駐したこともある。

94年女性大統領チャンドリカ・クマラトゥンガが就任したが中央銀行爆破、列車爆破とテロはやまず、ついにLTTEとの和平政策を模索し、ノルウェーに仲介外交を依頼した。99年には大統領選挙中にクマラトゥンガ自身が襲われ重傷を負った。再選された大統領は大きく妥協して、ようやく2000年、停戦声明を出すに至った。

声明は出たが、ゲリラとテロは終息せず、LTTEが支配する一部内陸地域は国道も閉鎖されるという情況は変わらなかった。01年政府軍は封鎖地域への戦闘を組織しLTTEは反攻するという内戦に発展してしまった。

01年12月、大統領の信任厚い内閣は瓦解し国民党ウィクラマシンハが政権首班となった。事態は劇的に転換して02年2月、停戦合意が成立した。

停戦合意を受けて、スリランカ復興支援多国会議が組織された。03年1月、川口外相がスリランカ、インドへ赴いたのも実はスリランカ復興計画への参画を表明しコロンボでの多国会議に出席するのが最大の目的だったのだ。

03年3月、日本の箱根で「スリランカ和平会議」が開かれた。日本は復興資金の提供を承認している。

政変にアメリカの影？

ようやくスリランカに和平がやってくる、とおもわれた一年だったが、突然、先週の11月4日、政変の報が飛び込んできた。ウィクラマシンハ首相がアメリカ訪問中にクラマトゥンガ大統領は主要閣僚を更迭、議会を休会し、国軍を配して情報凍結をおこない戒厳令の様相を呈している。

首相がブッシュ大統領との会議のためアメリカ訪問中だったというのが大きなポイントだ。そもそも01年12月、ウィクラマシンハ首相の誕生は9.11ニューヨーク・テロ直後の情況と無縁ではないのだ。ここにもアメリカの影が射している。

次回にはその後のスリランカとインド、日本のかかわりを報告する。

インド最前線 '03～04

The actual INDIA (03年11月23日)

第5回　インドから見たイスタンブール連続爆破

イスタンブール、連続爆破

11月20日、午後CNN、BBCに連携してインドの報道番組はこぞってライブを流し続けた。ヒンディ語、英語、カンナダ語と各局が特別枠だった。わずか五日前にユダヤ教会(シナゴーグ)がやられ、こんどはＨＳＢＣ銀行と英国領事館だ。HSBCはイギリス系銀行でインド各地にも支店がある。

当初、三名の死者と報じられたが、夕刻にはどんどん増えて27名、負傷者は多数としかわからない情況だ。

今回の二ヶ所の爆破対象はインド人には複雑だ。長い植民地時代とそこからの独立の歴史がある。反発しつつ生活にしみこんだものを否定できない。第一次大戦時も第二次にもインドはイギリスに従って参戦した苦い経験もある。イギリスは特別な国なのだ。イギリスが攻撃対象になるとき、どちらに与するのか、心情は微妙だ。これはイスラム教ムスリムもおなじだ。

冷静なインド人

政治経済を専攻する研究者たちと早速議論をしてみた。彼らは冷静に判断するだろうという前提を立ててのことだ。

まず、この前提におしなべて苦笑いが返ってきた。意地悪な日本人！ということだ。ことは深刻な事態であるに違いないが、ブッシュとブレアが並び立って会見をした姿がこの情況をアイロニカルに、しかし的確に表しているというのが議論の行く先だった。

爆破をおこなった方もやられた方も、イスラエルを軸とした中近東、南西アジアのあらたなドクトリンが争点になっていることを明らかにしてしまった。

犯行はアルカイダか？

21 日の朝には、犯行声明がでたという報道がこちらではあった。トルコ当局の発表だ。つづけて七人の実行容疑者を逮捕したと報じた。実に早い。

アブハフス・アルマスリ旅団というトループ（軍団）だという。残念ながらこの旅団に予備知識がない。22 日には、この旅団がアルカイダの傘下組織だと CNN は報じた。

この HP 紙の「中東 TODAY」で佐々木良昭が指摘している通り、筆者も現在のアルカイダが先のサウジアラビアや今回のトルコなどに横断的な展開が出来るとはおもえない。手法も対象も違う。佐々木氏もちらりと触れているが、謀略の臭いすらする。

イラクお手上げのいま、テロ撲滅を命題にしてネオ・ドクトリンを押し進めるのならアメリカは中近東、西南アジア全域を対象にした第三次世界大戦クラスの泥沼ベトナムを覚悟すべきだろう。

インド最前線 '03〜04

The actual INDIA

第6回　モスク爆破とヒンドゥパワー（03年11月22日）

ラマダン（断食儀礼）のモスク爆破

11月21日金曜日午後1時30分、西インド、マハラシュトラ州パルバーニ郡マラトワダのイスラム教会モスクが爆破された。

金曜日の午後1時、しかも断食月の現在、重要な昼の儀礼「ナマズ」の時間だ。幸い小規模だったようだ。死傷者はあきらかになっていない。ただちにモスク内に収容され外部への発表を拒んでいる。

マハラシュトラ州はムンバイ（ボンベイ）が州都で、90年代初期のムスリム対ヒンドゥの激しい騒擾が記憶されている。

犯人はいったいどのような組織なのか。目的はなにか。その後、情報は途切れている。

実はわが家の斜め前はモスクで、21日の朝から突然、警官隊が張り付いて警備するようになった。

この件に関してはインド中が息を潜めて成り行きを見守っている。十年前の騒乱だけは避けたいというのがムスリムにもヒンドゥにも共通したおもいだ。

ヒンドゥイストの過激な発言

副首相L.K.アドヴァニがまた諧謔に満ちた過激発言をした。アドヴァニについては注目人物として昨年からたびたび採り上げているので過去のこの蘭を参照して欲しい。

20日夜、彼の官邸で催しがありその折記者たちの求めに応じての発言だ。要旨は、「アルカイダ＝タリバンというのはいうなれば非政府組織（NGO）で、それより恐ろしいのはパキスタン軍務情報局（ISI）だ。アルカイダには常にマネーロンダリング（合法資金化）が問われている。ISIは政府機関（エージェント）だからそんな必要がない。追い詰められることがない。」というものだ。

パキスタン敵視を政治信条にしているアドヴァニらしい発言だが、現状の認識が見え隠れしている。

アルカイダ液状化現象

彼の発言にはアルカイダがすでに資金的に行き詰っており戦略的対象から外れつつある、との認識を読み解くことができる。ならば、サウジ、トルコそして一向に止まないイラクでのゲリラ＝テロは別組織のアルカイダ的軍団ということになる。アルカイダに呼応する地場の組織だ。すでにタリバン（聖戦士）でさえないかも知れない。

アルカイダはキャンペーン集団となり裾野へ液状化しているといえる。

21日のマハラシュトラ、モスク爆破も、8月のムンバイテロとおなじように還流者、出稼ぎ先の湾岸国で教育を受けたテロ志願者の可能性が高い。しかも爆薬を持ち歩いた末の誤爆ということであろう。大きく発展しないことを祈るばかりだ。

インド最前線 '03～04

The actual INDIA

第7回　バジペイ首相の周辺諸国訪問と対中国（03年11月24日）

インドの外交戦略

11月初旬から中旬にかけてバジペイ首相は精力的に周辺国を訪問した。パキスタン、トルクメニスタン、タジキスタン、ネパール、バングラデッシュなどだ。この欄の第1回「国境のない戦線」に報告した国境地帯をぐるりと訪ねたことになる。なぜ今、という疑問が起こる。インドでも真意を測りかねているのが現実だ。下世話では、バジペイ内閣も今期限り、来年には新政権だろうから修学旅行だろう、といった揶揄がある。ところがどっこい、である。

バジペイの動向に即時反応したようにパキスタンのムシャラフ大統領が中国を訪問した。

インド側の中国との最近のいきさつは第2回「インドにとってのアセアン首脳会議」に記した。

アメリカのたびたびの要請にも関わらずインドもパキスタンもイラクへの派兵を見送っている。それぞれ違った理由が推測できるが、アメリカとの良好な関係を保有しながら政治戦略を強固にしなければならない事情は共通している。ポスト・ソヴィエトの状況下、両国とも中国への接近は不可欠なことだ。

中印国境問題

11月中旬、ヒンドゥ・スターン紙や一部国内TV放送などで、インド国軍関係者が中国領土内で会談するという報が流れた。東北部国境地域らしい、という非公式の報道だ。中印が1962年以来、国境を巡って紛争状態を解消していないことはすでに記した通りだ。インド佐官級が訪問会談とは通常のことではない。

遂に公式には発表されなかったこの会談は、国境警備に関する実務者会議であったらしい。国境警備になんらかの取り決めがおこなわれた。

国境策定が確定されないまま、警備について実務会談が開かれたというのは新た

な事態の発生を予測してのことか、双方合意による警備を緩めるか、のどちらかだ。おそらく両方だろう。ブータンとチベット地区に接した地帯だが、ネパールの不穏な情況を意識しているのは確かだ。ムシャラフ訪中の後におこなわれた実務者会議は、ネパールの毛沢東派への牽制、そこには中国の毛派支援への牽制を含めた意図がある。

10月24日、アメリカ外務省は米人のネパール入国を制限するよう勧告した。反米感情が高まっているという理由だった。

10月10日のゲリラ以来、ネパールから毛派に関する情報はない。が、ネパールの不穏な状態はインドにとって脅威なのである。

インドは中国を軸にアメリカ中心ではないもうひとつの均衡を戦略化しようとしている。イラン、イラク、アフガンなどの対米紛争国を除いた諸国を取り込もうという意図が見える。

パキスタンも後手を取るわけにはいかない。11月24日、パキスタン首相は2000年紛争以来の国境策定（アクチャル・グラウンド・ポジション・ライン）に応ずる、とデリーに伝えてきている。ムシャラフ訪中の結果を反映している。

インド最前線 '03～04

The actual INDIA

第8回　スリランカとインドの政治経済（03年11月25日）

商工会議所会頭スリランカを語る

マンガロール商工会議所会頭R.D.キニ氏に会った。氏は今年10月、会頭に就任したばかりである。去る3月、東京財団において同会議所の事務局長を招いてシンポジウムを開いていることをご記憶の読者もいるだろう。

会見の目的はスリランカの現下の情勢と経済交流についてである。

すでにこの欄ではスリランカの政治情勢が予断を許さない事態にあることは報告した。そして続報を約束した。

今年3月、神奈川県箱根でスリランカ復興支援国際会議が開かれ多国間支援の方向が定められている。その二ヵ月後、マンガロール商工会議所はスリランカ訪問団を派遣している。すばやい動きだ。支援資金がどのような経済波及効果を獲得するか、南インド経済圏はどのような対応ができるか、を探ったに違いないと判断したのが会見の意図だ。

キニ氏は慎重ながらだんだんと打ち解けて、派遣とその後の情勢をインド経済一般に絡めながら語ってくれた。

インド・スリランカの政治経済展望

先のマンガロール商工会議所会員のスリランカ訪問は旅行業者と漁業産業者が主だったということだ。旅行業、旅行代理店業者はスリランカ観光の可能性を視察した。

旅行好きのインド人たちだが海外旅行にはルピー対ドルの格差があまりに激しく日本や欧米には出稼ぎ以外は足が向かない。最近は国内旅行にはパックツアーもでてきていて好調だ。スリランカなら可能ではないか、という発想は頷ける。それに台湾や韓国からの旅行者を南インドからスリランカへ回遊する、というのがある。なるほど手の先に届くような島、スリランカは周遊圏なのだ。しかし治安は？

キニ氏の話は、スリランカとインドの政治状況が視野に入ってくる。

70年代からいきさつはともかくとしてキニ氏の見解ははっきりしている。現大統領クマラトゥンガがタミール・イーラム解放の虎（LTTE）を憎悪するのは彼女が過去に襲われたこともあって当然だが、統一国民党の首相ウィクラマシンハに押さえ込まれるだろう。先の選挙（01年12月）で統一国民党は圧倒的勝利を治めているし、彼は経済再生を旗印にしている。11月4日の政変も戒厳令に近い状態は首相がアメリカから帰ってすぐに雲散霧消してしまった。インドもスリランカも当分は親米路線を外さないだろう。経済を優先政策にしている限りアメリカを外せないのが現状だ。アメリカにとってもインド洋上のスリランカとアラビア海インド領ラクシャドウィープ諸島はペルシャ湾への要路で、良好関係を維持しなければならない。日本だって、ノルウェーの平和外交があったからではなくアメリカの意向に乗って復興支援に積極化したのだろう。

ならばLTTEは？

本来インド側海岸線の出身だったタミール語族LTTEが内陸に追い込まれている情況は彼らにとって勝利的展望を与えてはいない。彼らに経済的救済の道を与えればザッツオールだ。治安の心配は実態はそれほどではないし、近い将来落ち着くと見ている。

最後にキニ氏は結んだ。

「インドは民主社会主義的な政治、統制と規制の行政で独立解放以来やってきた。しかしこの先10年を見ていてください。経済が主導するインドになっていますよ。10年です。10年後を見てください」

地方経済人の意気、盛んだった。

ラマダン（断食月）が明ける

前回速報した印パ国境の策定について、25日、パキスタンはインドに対し一方的に通告してきた。カシミール国境を現状固定（アクチャル・グランド・ライン）し、停戦する。これは26日のラマダン明け祝日を期して実効する、というものだ。

筆者は今週、パキスタンへ旅立つ。

インド最前線 '03～04

The actual INDIA

第9回　印パ停戦の現実　その1（03年12月14日）

停戦の国境

インド・パキスタンの国境地帯を歩いてきた。うろついてきたといった方が適切だ。

パキスタンの側から現下の情勢を把握することは重要なことだと判断して厳しいことを承知で多くの人に会い、ナマの情況を観察してきた。

印パ国境のワガ（Wagha）村が今回停戦ラインとなった所だ。インド側へ入るとアムリトサル地区になる。

ワガ村は予想に反して豊かな穀倉地帯で、米、麦、綿の農業地帯だ。国境の町ラホールから西へ4、50キロの地点になる。印パ越境のゲートがある。常に20両ほどの運送トラックが待機している。印パ経済ルートでもあり、通行時間が限られていて許可を得るのも容易くはない。白い顎髭を蓄えたタバーン姿の運転手はアフガン、インド、イランを走っているといった。パシュトウン族だった。

大きな荷物を持った商人の一団に出会った。警戒心旺盛だったが重い口をひらいた。パキスタン絨緞のブローカーだという。昔なら駱駝を連ねた隊商だろう、といったらはじめて微笑んだ。

トピックはインド首相バジペイの訪パ

国境と警備、印パの戦略などについては回を重ねて報告しよう。現在最大のトピックは今月17日、インド首相バジペイがパキスタンを訪問することだ。この訪問会談によって印パ停戦が本物で歴史的な和解に繋がっていくのか、誰もが注目している。会談の結果は中東、イラン、イラクの情勢にも影響を与えるであろう。

先週、パキスタンのムシャラフ大統領はヨーロッパへ赴いた。バジペイを迎える直前の政治意図が窺がえる。パキスタンの実業家で政治通は、昨年の無風選挙のあとのムシャラフは大変いいバランスで動いている、と評価していた。すでに報告し

た中国、アメリカとのスタンスについて意見を交換した。いずれくわしい報告を約束する。

やはりカシミールが焦点

ワガ・アムリトサトル停戦ラインについては多くの報道があり、ほぼ三週間平穏に経過している。しかし印パの最も大きな課題であるカシミールについてはそう多くはない。

先週、CNNはカシミールの川を挟んで分離された家族が、チョコレートやパンを投げ渡す光景が報じられた。筆者はアラブ首長国連邦のドバイで観た。ドバイでもパキスタンでもインド側のヤラセじゃないか、と苦々しいコメントが多数だった。今週、ドバイの週刊誌に立ち会ったと見られるインドの記者がレポートしている。意図的な臭いはするが、カシミール問題を忘れるなという警告を発したいインド側の気持ちはわかる。同時にパキスタンのものでもある。

ムシャラフ、バシペイ会談は結局中国管理地域を含めたカシミール問題をクリアしなければ双方の国民合意は得られないだろう。タリバン養成機関があるとか、テロリストのふるさととともいわれるカシミールに停戦ラインが生まれなければ、なにも解決されないのだ。

先々週、先週とカシミールでは数人単位で殺戮がおこなわれているのが現実だ。

インド最前線 '03～04

The actual INDIA

第10回　サダム・フセイン拘束の意味（03年12月14日）

拘束逮捕の前後

12月14日、ゆったりとした日曜日の午後、サダム拘束のニュースが飛び込んできた。同日早朝、サダムの故郷ティクリートで眠っているところを急襲されたという。

午後6時、BBC、CNNには身体チェックを受けるサダムの変わり果てた姿が写しだされた。一部に付け髭で変装していたとあるがどうも本物の顎髭だ。モスクの門前にうずくまる老いた行者のようだ。

アメリカの公式発表はインド時間の午後8時現在ないが、イギリスのブレアー首相はいち早く会見している。最近の不人気を一気に取り戻そうとするかのような勢いだ。いささかはしゃぎすぎだ。

拘束の主役はクルド

拘束した米軍コンバットを導いたのはクルド愛国同盟（PUK）だった。愛国を名乗りながら国家を持てないクルド族がサダムを捕らえた。湾岸戦争時、サダムに大量虐殺されたクルドが拘束したというのは納得しやすいストーリーだ。イラク北部ティクリート以北はクルド自治区があった地域だ。拘束後の第一報は同盟のクスラト・ラスル・アリが発表している。政治戦略の臭いが芬芬とする。アメリカが逮捕人物のDNA鑑定をしたこともラスル・アリの発表だ。

クルドはベトナム戦争に加担し、結局アメリカに裏切られてイラク、アフガン北部に閉じ込められていた。民族国家樹立の悲願は達成されていない。イラク新政権に参与、あるいは分離独立しようという意志をアメリカが巧妙に利用したのではないか。

クルドよ、自戒せよ、ベトナムの愚を繰り返すな。

粘着質の執念深さと戦闘能力の高さで知られるクルドだから、そう簡単にアメリ

カの意図どおりにはいかないだろうが。むしろアメリカが荷物を背負い込んだことにならないだろうか。

いま、なぜフセイン拘束

しかしこの逮捕劇、なんかとんちんかんだ。連日起こるイラクでのゲリラはサダムの企てとはおもえないというのはもはや定説だ。液状化したイスラム原理主義を止める効果はまったくないし、老いたる行者サダムから大量破壊兵器の実態が明らかになるとはとてもおもえない。

イラクはますます混迷していく。インドとの停戦を心から喜んで迎えているパキスタンの人びとは、次にくるハイテンション（緊張）をなによりも懼れている。それが、中東、南アジアの現実だ。

インド最前線 '03～04

The actual INDIA

第11回　印パ停戦の現実　その2（03年12月16日）

ムシャラフ大統領暗殺未遂

12月14日、サダム・フセイン逮捕拘束の大ニュースの影に隠れて伝えられたムシャラフ暗殺未遂の報は、17日の劇的な印パ会談の序幕ともいえる。

空軍視察を終えた大統領が帰路、首都イスラマバードの南数十キロのラワルピンディ郊外の橋を越えた直後、爆破に遭ったというものだ。橋を超えて数十秒後のことだったが護衛の車列にも被害はなかった。大統領自身、爆破の衝撃を感じたとのことだ。まさに間一髪だった。大統領報道官は即座に宗教コミュニティが背後にある事件だとコメントした。

偉大なイスラム指導者の死

事件の3日前、ひとりのパキスタンでは誰もが崇敬するイスラム指導者が死んだ。マウラナ・ノーラニ、78歳だった。彼はムスリム共同体組織（MMA）の代表理事でありパキスタン政治への計り知れない影響力を保持していた。12日の各紙は一面トップでその死を報じ、三面、国内版には彼の人生、思想などが特集されていた。

死を伝える一面には大統領、首相が急遽、揃って悔みのことばを捧げたと記している。

そのおなじ一面に「ムシャラフは語る、MMAは脅迫を止めるべきだ」という見出しがある。MMAの代表が逝去し悔みを述べたおなじ紙面での記事なのだ。

イラン国境の人びと

ムシャラフ大統領の発言は、バローチスタン州都クエッタを訪れた11日、地域の代表団との面談でのものだ。

バローチスタン州はインド国境の反対側イラン、アフガンに接する地域でパキスタンにとってもうひとつの政治課題がここにある。軍服姿のムシャラフがタバーン

に羊毛の肩掛けをした男たちに囲まれ握手している写真がついている。

なによりこの地域は高原でありながら砂漠で生産性の低い土地柄だ。もともと遊牧民の行き交う地域で、地域語バローチを遣うバローチ族が多数派だ。バローチ族はイラン建国によってイ・パ両国に分断されてしまった歴史を持っている。パキスタンの生命線のひとつだ。

ムシャラフ発言事情

ムシャラフ発言の要旨は、

1) バローチスタンの経済振興をより活発にする。

2) いかなることがあってもアメリカの軍事行動をパキスタン国内に持ち込まない。

3) 国軍との緊密な連携を図ってタリバン、アルカイダなどの活動を許さない。

と強調した。だからMMAは政府の方針（親米、印パ融和）などを批判、扇動しないで欲しいというものだ。特に12月18日以降は遵守して欲しいと結んでいる。

暗殺未遂事件の後、なんらかの宗教集団の関与という政府見解に、インド側が養うヒンドゥナショナリストでは、といった即時反応は過去のことだ。現在のムシャラフのバランス感覚では単純な図式にはなりえない。そしてタリバン、アルカイダの名をあげて、しかし現在の実態を見失っていることをも表している。パキスタンの現実がここにある。

インド最前線 '03～04

The actual INDIA

第12回　印パ停戦の現実　その3（03年12月19日）

読者からの手紙

本欄の読者から手紙が来た。差出人は竹沢徳剛、学生とある。若い読者からの反応をうれしく受け取った。今回は彼のコメントに応えるかたちで報告したい。

森尻氏のインド最前線、いつも興味深く読ませてもらってます。
アメリカがクルドの微妙な政治的スタンスを見極めた上で、上手く利用していること。
アメリカの態度にナーバスに敏感になっているパキスタンの人々の様子、非常に興味深いです。

サダム拘束とアメリカ

この二、三日、サダム・フセイン拘束に際してアメリカ側からの情報、噂がいろいろ伝えられている。催涙弾を使ったとか、サダムのシンパとかねてから通じていたとかいった類だ。クルドが先導したことはアメリカ側からは出てこない。拘束直後の情報とは質を変えている。アメリカはクルドの活躍に焦点が当たるのを嫌っているようである。

ムシャラフが訪問したバローチスタン地域はイラン国境地帯で、バローチ族はイランで事変が生じた場合、国境を侵され戦闘地域になることを恐れて大統領に直訴したわけだ。ムシャラフはアメリカの領土介入を許さない、と応じた。

次のアメリカが向ける目はパキスタンなのでしょうか？もしくはイランはどうなのでしょうか？

アメリカがパキスタンに直接関与することは現在の情勢ではないとみていい。し

かし、印パ、イラン・パキスタンの国境はアメリカにとって重大な関心ポイントだ。印パ、カシミールが緊張すればアメリカの中東戦略に大きく影響する。

パキスタンが親米路線を放擲したらアメリカのアフガン、イラク、イラン戦略は挫折する。イランへの介入は核査察を切り札に現在、国連と同伴しながら締め付けを続けている。ペルシャ湾への石油パイプラインの拡充、新設はアメリカの宿願なのだ。ネオ・コンサヴァティブ＝ブッシュ政権の命運がここにある。

イスラムナショナリストとアルカイダ

抑圧されたイスラム教徒の感情は暴発しないのでしょうか？特にトルコなどの親欧米国のなかでの見落としがちなイスラムナショナリズムの潜在性もある気がします。

すばらしい視点と鋭い質問だ。

トルコの副首相が日本訪問している。どのようなコメントが出てくるか、注目に値する。答える日本側の発言もゆるがせに出来ない。

先月のトルコでの二度に渉る大規模なテロに対して、最近アルカイダの犯行といった報道がされている。かねてからウサマ・ヴィン・ラディンとその一党のアルカイダは実質的には指揮権を阻喪してすでに液状化していると見ている筆者には納得できない情報だ。実はフセインの後はヴィン・ラディン拘束という照準の立て方に物語の整合性を求めた情報と見た方が適切だ。

古くはパキスタン領カシミールで、その後はアフガン北部で訓練を受けたテロリストたちはアルカイダである前にナショナリストであり多国籍イスラム主義者なのだ。

20 世紀後半、第二次大戦以降、最も拡大再生産された宗教コミュニティはイスラムだ。なぜそうなったのか。南アジア、中近東を視野に現代史を学び直さなればならないときを日本は迎えている。

中東、印パの動向に非常に関心を持っています。森尻氏の身体の安全を願うと共に、更なる報告を期待しております。 竹沢徳剛　学生

ありがとう。がんばります。

期せずしてこのページがフォーラムとなったことに喜びを感じる。より多くの読者との交流を願っている。

インド最前線 '03～04

The actual INDIA

第13回　印パ停戦の現実　その4（03年12月21日）

印パ頂上会談の延期

ムシャラフ・パキスタン大統領とバジペイ・インド首相の頂上会談が延期された。パキスタンでもドバイでも大々的に報じられた劇的会談は尻つぼみに消えてしまった。期待に胸を膨らませていたパキスタンの人びと、ムルタン大学の先端技術学科の学生やパキスタン航空の俊英マネージャーの落胆した顔が浮かんでくる。

しかし事態は悲観的な方向に向かっているわけではない。

印パ頂上会談は、来年1月、イスラマバードで開かれる南アジア地域協力連合首脳会議（SAARCサミット）に席を譲ったということだ。SAARCは関係国による年次会議で各国が回り持ちで主催されている。パキスタンが招請国になるのは初めてだ。参加国はモルディブ、スリランカ、印パ、ネパール、ブータンなどである。

和解への道

焦点だった12月17日、インドは内閣警備室のメンバーをパキスタンに送って、バジペイ訪パの警備計画を協議している。どうやら警備担当だけではなく会談の内容まで踏み込んだ根回しのようだ。

早速翌日、ムシャラフは外国人記者のインタビューに答える形で印パ問題の所信を語った。要旨は、

1）印パは中間点（ハーフウェイ）で出会おうではないか。

　ハーフウェイとは印パの地理的条件をいっているのではなく、象徴的な表現を遣いながら、妥協点を見出そうという意思を表している。

2）われわれは傍ら（レフトアサイド）に国連決議を持っている。

　カシミール問題に関して1970年代、第二次印パ戦争終結に際して議決された国連決議を座右において協議しようではないか、といっている。

その上で彼は、この問題をけして放棄（ギブアップ）しない、と強調している。

例によって硬軟取り混ぜた主張だが、今回の停戦から両国の宿願である平和解決に発展することを望んでいる姿勢が伝わってくる。

国境共同警備

12月21日日曜日、あたらしい情報が入った。

印パ国境警備を両国警備隊共同でおこなうことになったというのだ。パキスタン側ワガ、インド側アムリトサルのゲート周辺を両国警備兵が行き交いながら警備するという。長い紛争の歴史では考えることもできなかった情況が出現する。

早朝のニュースに、わずか十日前、筆者が立っていたゲート前に着飾った儀仗兵が整列している映像が流れた。

印パ和平の靴音は着々と近づいている。SAARCは、来春4日からイスラマバードで開催される。

インド最前線 '03～04

The actual INDIA

第14回　ブータン、おまえもか？（03年12月22日）

最後の桃源郷・ブータン

ブータンといえば、インド、中国（チベット）に囲まれた小さな王国で、ヒマラヤ東端の平和国家、アジア最後の桃源郷というイメージだ。なかなか入国しにくいし事実外国人の訪問には厳しい条件が課せられる。ミステリアスで不可侵なこの国で不思議なことが起こっている。

インドの国境地帯でもっとも安定しているといわれ、南のスリランカ、北のバングラ、ネパール、中国、パキスタンは話題にしてもブータンを問題視することはなかった。それがインド国境を挟んだ事変のニュースである。

国境を侵されていたブータン

最初の報道は12月16日、発端は15日、ブータン王国軍が国境地帯に侵入している反インド武装集団を締めだす、とインド政府に通告してきた。
武装集団はブータン国内、10数箇所に12年間に渉ってベースキャンプを構築していたという。インド側で情報を得た副首相アドヴァニはただちに西ベンガル州、アッサム州政府首相にこの情報を伝えた。

西ベンガル、アッサムは紅茶の産地として知られ、日本の旅行者も多く訪ねる観光スポットでもある。70年代から80年代にかけてはバングラデッシュ独立にいたる経緯のなかで、多くの難民が流入し家畜小屋のような収容施設を筆者も目撃している。悲惨だった。そうした不穏にともなってゲリラの侵入もあり、当時の地域は観光どころではない緊張に包まれていた。

80年代後半には政情も落ち着いて、日本仏教の辿り来たルートのひとつとして馴染み深い地域になっている。そして過去の不穏にもブータンは一切関与していなかった。そのブータンがなぜ？

事件の経緯

同日、ただちにインド側は対応し州政府警備軍、国境警備警察が出動した。外交ルートでも国王に事態の共同収拾を要請した。バングラデッシュ政府も同調した。

武装集団はアソム前線解放連合（ULFA）など13集団、それぞれが連携し、武器庫に弾薬を貯え国境を越えてインドへ奇襲攻撃を仕掛けているとブータン側は伝えている。

18日には早くもブータン国王軍は武装集団トップを拘束したと発表した。

19日には交戦の結果、武装集団側に100名に及ぶ死者がでたと報じられている。ULFAは停戦呼びかけにも拒否の姿勢を打出した、と伝えている。

20日には、国境地帯に平和が回復されたと報じられ、記者の現地取材も入ってきた。それによると、武装集団はインド山岳地帯に敗走し、その際商店からコカ・コーラのボトルを略奪して行った、などという生活臭ある情報も伝えられた。

謎だらけ・事変の意味

新聞の一面を数日間にぎわせたこの事件だが、すばやい対応で解決したように見える。しかしどうにも事件の意味と対処に理解不能な事柄が多すぎる。外国通信社も納得できずに対応できないようだ。

まず、12年間もベースキャンプを持っていた武装集団の実態とはなんなのか。昨年から今年にかけて何度かバングラデッシュでのテロが伝えられている。それと関連するのか。ネパールの毛沢東主義集団と連携しているのか。本当に反インド集団なのか。

そして、ブータンの作戦行動の動機はなんなのか。12年間温存していたものをなぜいま、行動に至ったのか。

これらの課題はいずれ現地近くに赴いて探索することにする。

東洋最後の楽園ブータンも中近東、南アジアを覆うテロリズム液状化に無縁ではなかったようだ。

インド最前線 '03〜04

The actual INDIA

第15回　防衛大臣ジョージ・フェルナンデス（03年12月24日）

現内閣のクリスチャン閣僚

現在のインド、バジペイ内閣の注目すべき閣僚は副首相L.A.アドヴァニと防衛大臣ジョージ・フェルナンデスを措いてないだろう。

アドヴァニは強烈なヒンドゥイスト（ヒンドゥ主義者）で次期政権をうかがう最右翼と目されている。この注目すべき人物像についてはいずれの機会に譲るとして、ここでは防衛大臣ジョージ・フェルナンデスを紹介したい。

日本では自衛隊のイラク派遣などで議論沸騰の昨今、インドの防衛戦略を理解するための一助になれば幸いだ。

ジョージ・フェルナンデスとはインド人にはめずらしい西欧風な名前だ。そのはずで、彼の家系はカソリック・クリスチャンだ。しかも南インド、カルナータカ州の南端マンガロールの出身だ。すでにお気づきの読者もあろうがマンガロールといえば筆者が拠点とするアラビア海沿岸の中都市だ。市内の彼の生家には現在も縁戚の人びとが健在だ。

クリスチャニズムの社会観と決別

マンガロールで初中等教育を終えた彼は州都バンガロールの修道院学校へ赴く。この地域のカソリック家庭では、複数の子息を得た場合、優秀なひとりを神父にする道を選ぶことが多い。ジョージもそうしたひとりだった。

しかし第二次大戦直後、独立解放の途上にあったインドで10代末の青年はキリスト者教育に疑問を持つ。飢えと貧苦にあえぐ人びとを現前にして若きジョージは神父教師に激しい議論を仕掛けた。そして神学校と決別し社会運動へと向かう。ムンバイ、当時のボンベイに赴いた。

労働組合運動でのキャリア

労働運動に参画した彼はたちまち頭角を現わす。タクシー労組、国有鉄道組合などの組織化にめざましい成果を上げた。彼の手腕が発揮されたのはなんといっても1971年、国有鉄道の全国ゼネストで三日間に及んだ。

やがてインディラ・ガンディ政権が誕生する。インディラはようやく勝ち得た開放インドを真の独立国家として存立させるために強権的な力技で国内改革、外交に当たった。それが第二次印パ戦争を引き起こし、国内では土地所有者とそうでない者との格差を生みだした。結果的にはヒンドゥ・ナショナリズムを養ってしまった。

宿敵インディラ・ガンディ

ジョージ・フェルナンデスはインディラ・ガンディとその党、コングレス（国民会議派）に抵抗し続けた。インディラ政権の末期、8ヶ月に及ぶ非常事態宣言下、地下活動を余儀なくされ橋梁爆破闘争を指導したといわれている。

この頃、活動の拠点をインドで一番貧しい地方といわれたウットラプラデッシュ州に定め、ここで遅い結婚をする。相手はムスリムの活動家の息女で、しかもその母はヒンドゥである。

やがてインディラの時代は終焉し、ますます政治に近づいた彼は1990年代、防衛大臣となり現在に至っている。

防衛大臣としての戦略

インディラ・ガンディの政治姿勢は第二次世界大戦後に独立した第三世界諸国と踵を揃え親ソヴィエト・ロシアであった。それが当時のコングレス・国民会議派の党是でもあった。フェルナンデスはそうしたインディラに対抗したこともあり、親欧米派だった。

労働運動に挺身しながら社会主義には傾かず、ドイツ労働党（当時、西独）や親アメリカ路線を保ったジョージ・フェルナンデスはあたらしいタイプの民族主義者といえる。

ソヴィエト崩壊後、彼の政治姿勢はようやく多くの支持を得て90年代、遂に防衛大臣になった。

国軍には多くのイスラム教徒がいる。伝統的にシックゥ教徒の兵士も人口比を凌いでいる。複雑な共同体が混合する軍組織をまとめるのにフェルナンデスは最適な人物である。親米を基本路線にしながら、中国とのパイプを外すことのできない現実に対応力を発揮する大臣として現閣僚のなかで重みある存在になっている。

国境なき戦線の時代、だからこそ国境にこだわらなければならない現実政治の局面で、パキスタンと停戦し中国にシッキムの領有を認めさせた2003年であった。

選挙と内閣再認が焦点となる04年、フェルナンデスがどのような動きを見せるか注目するところだ。

蛇足ながら、彼の子息は今年、日本女性と結婚している。

インド最前線 '03～04

The actual INDIA

第16回　パキスタン大統領暗殺未遂（04年1月1日）

2004のインド

新しい年を迎えたインド、今年はどんなインドの貌が現われるのだろう。

03年の経済はまずまずだったようだ。GDP、外貨保有、貿易収支など好調な数字に推移しているようだ。いずれこのページで報告する。

今年はなんといっても選挙の年で、年末から新聞は各州の選挙候補者、政党情報、そしてインド特有の選挙人名簿の確定に関する記事がひしめいている。

現与党インド人民党（BJP）優位としながら統一会議派（コングレス）がどこまで追い込むかが焦点ということだ。コングレス党首ソニア女史は故ラジヴ・ガンディ夫人でイタリア出身だ。コングレス内部にもイタリア人がインド首相になるのはおかしい、と公然と言い放つものがいる。ここにも現在の野党第一党の問題がある。

もうひとつのトピックは新春に開かれる南アジア地域協力連合首脳会議（SAARC）だ。ここが印パ停戦から和平実現になるかの正念場だ。

物騒なクリスマスプレゼント

クリスマスの12月25日、ひとつのニュースに驚かされた。パキスタンの軍事基地の町ラワルピンディで2台の自爆テロ車がムシャラフ大統領の車列を襲い14人の市民を死亡させ60人以上に負傷を追わせたというのだ。ラワルピンディといえば、その10日前14日のムシャラフ大統領を襲った橋梁爆破暗殺未遂があったところだ。わずか300メートルしか離れていないという。大統領一行に損害はなかった。プラスチック爆弾「C4」が使用されたという。市民に犠牲者まで出して政治的謀略ではないだろうが、なにかできすぎた話だ。

パキスタン治安局はアルカイダの関与とその日のうちに発表した。

すでにこの欄でも報告したように12月17日にはインド内閣官房警備室が事件後の現地を視察している。そこまでしておなじようなテロが発生するとは警備能力が疑

われる。やはりなにかの意図を読まざるを得ない。

その後、印パともにパキスタンの警備能力はランクアップしたというキャンペーンともとれる記事が年末から年初にかけて散見された。

ムシャラフを取り巻くふたつの事情

テロ前日の23日、ムシャラフは2004年末をもって全軍参謀長を辞す、と発表している。軍政から民政へ移管した03年を経て、軍人としての地位を棄てるということは重大なことだ。軍内に将来への不安と不満が鬱積していることは確かである。パキスタンは軍の勢力を無視して政治戦略の立てない国なのだ。それを押さえ込もうとするムシャラフへの反発は充分考えられる。

アルカイダ関連、と断定するのは、彼ら自身にも実態が把握できなくなったアルカイダの存在を有名無実化する政略ではないだろうか。アルカイダ関連国といわれてきたパキスタンのアメリカ、SAARC参加国、特にインドに対する融和政策と企図しているのだ。

元旦には民間機相互乗り入れが二年振りに決定した。

反テロ、経済交易、地域安定、そして印パ和平が課題になるSAARCがいよいよ開幕する。パキスタン人の多くが期待するムシャラフの均衡政策として生きて発展していくのか。この南アジアの動向が中東に与える影響はどうなのか。注目である。

インド最前線 '03～04

The actual INDIA

第17回　印パ・南アジアサミットを終えて（04年1月13日）

SAARCサミット終了・その成果

パキスタンの首都イスラマバードで開かれていた南アジア地域連合協力首脳会議（SAARCサミット）が1月6日、三日間の日程をパキスタンの首都イスラマバードで終了した。

最も注目されたのは昨12月に停戦したインド・パキスタンが停戦ラインをカシミールにまで及ぼし本物の和平へ向かうのか。その歴史的首脳会議があるのか、ということだった。

確かに印パ首脳会談は全体会議とは別に持たれた。しかし国境の固定と永久的休戦には至らなかった。

年末頃から盛んに事前観測の記事が数多く発せられていた。概ね、その予測を裏切るものではなかった。劇的展開はなかったということだ。いわば肩透かしともいえるのだ。SAARC後、どのような論調が現われるのか、数日、注視していた。

SAARC・インドの思惑

しかし、新聞各紙をはじめ大方は今回の印パ首脳の動向に好意的だ。インド、バジペイ首相がパキスタン首相ジャマリ、大統領ムシャラフと会談を重ね、印パ和平への道筋を創った、と評価している。

インド側としては、2001年のあわや核使用に至る戦争か、とおもわれた緊張から民間航空の相互乗り入れ再開、停戦ラインの遵守、陸路国境交通の再開への道が開かれたといったことを評価している。

背景には、首脳会談を前にムシャラフ大統領の中国訪問、インド側がかねてから提案していたワガ地域停戦ラインの結果としての承認、そしてムシャラフ自身の軍最高参謀辞任時期（04年末・既報）の表明などが好感を得た。ムシャラフの平衡感覚は本物と受け止めたのだ。

インド政府筋から流れてくるコメントも、インド側の政治戦略として失うものはなにもなく、SAARCサミットでのインドへの厚遇も満足なものだったというものだ。

果たしてパキスタンは？

パキスタンはどうなのだろう。ムシャラフ大統領は主催国として活発に動いた。ムシャラフにとっては南アジア諸国、インドを軸とした経済圏の確立がどうやら最大の目的だった。南アジア自由交易圏（SAFTA）を確立することに腐心した。

反テロリズムに関しても過去のいきさつをかなぐり捨てて、無縁を表明し経済交流への道を模索した、といえる。タリバンの養成期間がパキスタン側カシミールにあったとか、アルカイダとの関係は切れていない、といった批判には耳を貸さず南アジア諸国との関係強化を訴え続けたのだ。パキスタン政治の現在がここに集約されている。

やはりカシミールが焦点か

印パ和平ムードのなかで、カシミールは相変わらず荒れている。

SAARCを目前にした1月2日、インド側カシミール鉄道駅で乱射事件が起きている。

1月9日にはやはりインド側カシミールで金曜礼拝のイスラム寺院モスクが自転車爆弾で襲われた。両事件ともなぜか詳報が伝わってこない。

鉄道駅の事件は現場の生々しい模様が映像で流れた。しかし、テロリストが火を放ち、警備側が銃で応戦したという以外、詳報はない。モスクの方はヒンドゥの犯行なのか、それ以外のテロなのかすら報道がない。おそらく報道側もつかめないでいるのだ。

10日には、カシミールはよい方向にはあるが正常ではない、という解説記事かヒンドゥ紙にでた。報道陣の戸惑いが伝わってくる。

印パ首脳の和平への邁進をよそにカシミールは不気味な動静だ。やはり印パの最終的な課題はカシミールに帰結しそうだ。

印パ和平・アメリカの影

ムシャラフ、バジペイ会談の直後、アメリカの報道官は歴史的な会談がおこなわれたことを歓迎する、とすばやい反応を示した。7日、国防長官コリン・パウエルも同様趣旨の発言をしている。次いで9日にパウエルは印パ和平への支援を申し出る、と積極的な発言をしている。

アメリカが中近東を睨んで印パを重要視していることがよくわかる。

印パ両国とも親米路線を歩みながら中国との隣接関係を保ってきた現在、アメリカとの間にどのような未来図を持つか、注目したい。

インド最前線 '03〜04

The actual INDIA

第18回　カシミール、再び（04年1月19日）

やはりカシミールが！

1月16日午後、ジャム・カシミール（インド領）スリナガル域で国軍はイスラム活動家集団ヒズブ- ウル　ムジャヒディーンのトップをアジトに急襲、殺害したと報じた。

新聞には襲撃の混乱した室内で射殺された活動家の生々しい死体が写しだされている。17日にはやはりジャム・カシミールのバラムラで6人が死亡したと報じられた。

昨11月以来の停戦、1月初旬のSAARCサミットでの和平への合意と印パ政府は協調路線を進化させているにもかかわらずカシミールは一向に治まらない。

ムシャラフの声明

17日、パキスタンのムシャラフ大統領が声明を発した。ジハード、聖戦に名を借りた過激な宗派主義とテロリズムはパキスタン国家の民主主義的方向に対抗するもので、大きな損傷を与えるものだ。断固、戦うという趣旨だ。

パキスタンがテロの温床のようにいわれることへの国家的反証を表明したといえる。1月初旬の南アジアサミット後、大統領によるはじめての公式声明で、パキスタンの核保有についても言及している。核は防衛安全保障のために保有しているのであって、常に武装化するものではない。そういうことは考えていない、というのだ。

関連記事として中国が東タジキスタンを拠点とするテロリストのリストをパキスタンに送った、という記事が全国紙ヒンドゥにでている。中国、パキスタンが協調してテロリスト包囲網を巡らそうということだ。

ムシャラフの声明はしかし、カシミールの不穏に対応するものだとすれば、インド領内に起こったことを忖度したということになる。それほどにまでムシャラフ・パキスタンを過敏にしているのはなぜなのであろうか。

ムシャラフの特使、アフガンへ

南アジアサミットの直後、ムシャラフはアフガニスタンへ特使を送っている。復興に参画するというのだ。この参画は、支援というより復興のための経済活動に加わりたい、ということだ。南アジアサミットで合意された南西アジア自由交易圏の樹立にむけて隣国アフガンとの経済交流を獲得するという政略意図だ。ムシャラフの戦略はいよいよ本格的に和平国家パキスタンを目指してきた。

カシミールに冷静な印パ

インド側は16、17日のカシミール事件を冷静に受け止めている。パキスタンからの流入テロといった従来のコメントはでてこない。

ムシャラフに先制声明をだされしまった様相だ。それは、たしかにそうだ。ムシャラフの反応はすばやく適切だ。それにどう見ても今回の事件は、インドの問題で、パキスタンを非難できるものではない。インドの課題なのだ。

インドがカシミールにどう対応していくか。予断を許さない一方で、ジハードやアルカイダといわれるテロ組織自体がウサマ・ビンラディンとその一党といった枠組みとはまったく違う実体を顕わにしてきたことも事実なのだ。

インド最前線 '03～04

The actual INDIA

第19回　インド国会議員選挙（04年1月19日）

バジペイ首相の早業

今年はインドの総選挙の年ということはすでにこの欄で触れた。

昨年暮から連日、テレビニュース、新聞は各党、会派の動向を賑々しく報じている。

ところがこの一週間、思わぬ展開になった。12日、バジペイ首相が4月には新内閣を発足させよう、呼びかけたのだ。当初、選挙は6、7月と見込まれていた。しかし南アジアサミットを終えたばかりの首相が、急展開の発言をしたのだ。驚いたことに政界の大方は、この発言を受け止めて容認する模様なのだ。

次期宰相と目されているアドヴァニ副首相が、早速、首相に追従する発言をした。バジペイ首班で何の問題もない、と13日に表明したのだ。

これで選挙の先が見えてしまった。

インドの国会と州議会

インドの国会議員は各州、人口比による選出で州議会議員とは別の選挙で選出される。各州大体、20～30人程度の議員が選出される。首班、すなわち首相は議員の互選による。大統領選挙とも別枠である。大統領は政策政務に関わらない。

現在の与党はBJP、インド人民党だが一党で多数を取れず、小党派との連立である。最大野党はコングレス、国民会議派、インドで最も古くインド独立を勝ち取った伝統の民族主義党だ。現在はラジヴ・ガンディ未亡人ソニアが率いている。

インドは州政府の力が強く、各州、概ね150人程度の議員で構成されている。当然、野党政権、州によって共産党政権も存在する。イスラム・コミュニティはコングレスを支持し、カルナータカの場合その影響もあってコングレス政権だ。西ベンガル、ケララの二州は共産党が強く、しばしば政権を担っている。

印パ・印中・南アジアサミットの成果

昨年から新年にかけてバジペイ内閣はあわただしく動いた。

11月の印パ停戦にはじまって、新年早々の南アジアサミット、そしてその直後に首相は外務特使を北京に派遣している。昨年から印中の軍関係者が国境地域警備に関して協議していた国境策定を外交路線に切り替えての交渉のためだ。

北京での二度の会談は未来展望を開くものだったとの表明があった。1970年代からの懸案だった印中国境紛争が解決の見通しを得たのだ。印中経済関係の強化推進が進むなかで、カシミールを除いた東北部の国境問題が進捗したのは大きな成果だ。南アジアサミットの和平路線と経済政策推進の方向舵を中国が好感したのであろう。

この好機を逃すことなく、選挙時期を早め政権維持を提唱したバジペイの一本勝ち、といった情勢だ。残るは、カシミールの不安、だけだ。

経済政策といい、印中、印パへの外交戦略、あざやかな国内政略、ひとつひとつを検証するとインドの政治が成熟に向かっているように確かにおもえる。

インド最前線 '03～04

The actual INDIA

第20回　騒擾の王国、ネパール（04年2月4日）

王国の現在

北辺をヒマラヤに囲まれたネパール王国は釈迦誕生の地として日本人には忘れられない国だ。その穏やかで日本人の精神の故郷のような国が、この3、4年大変騒がしい。

2001年王宮クーデターで前王族が殺戮され、地下ゲリラ活動を続ける毛沢東主義派が加担していたという噂が信憑性を持った。そして学生運動が収まらない。

03年12月からはじまった大学ストはますます地域を拡大し、カレッジ(学部大学)にまで及んできた。引き比べて観光地域は平穏そのもので、中国、韓国、欧州、そして日本からの旅行者たちはカトマンドゥやポカラの湖畔をのんびりと散策している。観光は王国の重要産業のひとつなのだ。

学生組織のゼネスト提唱

1月26日、観光客が集中するアンナプルナ連山の麓ポカラにゼネストが発生した。学生組織が提唱したゼネストだ。市内はバス、タクシー、一般車両も通行禁止、準戒厳令の状態だ。商店のほとんどは休業、街の角毎にはチェックポイントが設けられ、軍が土嚢を積んだトーチカを築いて警備している。

前日の25日、首都カトマンドゥとポカラの道路が崖崩れのため通行不能となり筆者は結局、二日間、ポカラに閉じ込められてしまった。街角を往く度に銃を向けられてパスポートの提示を求められる。散策どころではない。ポカラの大学の先生たちに会うという約束もキャンセルの電話さえ受け取れなかった。大学人たちは休業状態で、しかも外出も控えている。親マオイスト、親学生組織と見られることに脅えている。

26日午後、急遽、カトマンドゥから首相がポカラにやってきた。夕刻、首相は「教育問題は根本的に見直しが必要だ」と声明した。

学生ストは一日に限っていたため翌日には解除され、街は平常に戻った。しかし学園ストは解除されていない。学生組織のゼネスト提唱は各地に広がっていくだろうというのが多くの観測だ。

なにが問題なのか

ポカラのゼネストは40人以上の活動家が拘束されて終わった。どうにも納得のいかない結末だ。学生組織は具体的な要求を掲げてはいない。現政権に対する闘争だ、といっている。大学の一部月謝の値上げや中等教育課程への教育費負担増を政府は提案している。だが、その撤回要求がストを組織しているわけではない。

学生組織の背後にはマオイストがいる、とか中国やインドとの関係をいう噂もある。しかし、具体的にはなにもでてこない。現政権は、むしろ学生組織を温存しているように見える。

根本的には、現王室と議会・政党政治の綱引きが要因だ。宮殿から発信される政治と政党が求める体制が亀裂を生んでいる。これが現在のネパールなのだ。

ネパールの動向はインド、中国に大きな影響を与える。ネパール情報とその意味を追ってみなければならない。

インド最前線 '03～04

The actual INDIA

第21回　パキスタンの核とインド（04年3月10日）

パキスタンの核搭載ミサイル

3月9日、パキスタンが核搭載可能のミサイル、シャヒーン2の発射実験に成功したとの報が流れた。攻撃飛距離2000キロの長距離ミサイルだ。

このミサイル実験についてはすでにムシャラフ大統領自身が去る2月5日、予告していた。リビアの昨年来の核政策転換にともなって、パキスタン核開発の父アブドル・カディル・カーン博士のリビアの核への関与が明らかになり、その処断に関するムシャラフの声明のなかで近未来のシャヒーン2実験に触れたのだ。パキスタンはカーン博士を断罪することはしないし、軍事戦略も変更しないという声明だった。

攻撃距離2000キロといえば隣国インドはすっぽりと射程に入る。しかし、いまのところインドは冷静だ。実験はパキスタン南部、アラビア海沿岸でおこなわれたという。三年前だったら一触即発の危機だ。どんな背景があるのだろう。

カディル・カーンとは何者

パキスタン核開発の父カディル・カーンは実はインドに生まれた。北インド、マッディアプラデッシュ州のボパールに生まれたれっきとしたインド人だった。

ボパールはインド中央部の旧都ウジェインに隣接する中都市で、古代アレキザンダーが侵攻した最終地だ。ここには石畳のローマ街道がそれと気づかれずに現存している。一般には文化都市として知られインド最古の大学をウジェインに擁して美術館、劇場が充実した静かな街だ。サンスクリット劇詩人カリダーサの生誕地域ともいわれている。

イスラム教徒であるカーン一家は1950年代初頭パキスタン建国に呼応してカラチに移住した。後に欧州に学んだカーンは70年代、インドに対抗してパキスタンの核開発に従事する。

カーンの核開発技術はリビアに輸出されたばかりではなく北朝鮮にまで及んでい

る。北朝鮮はパキスタンにミサイル開発を供与し濃縮ウラン化をバーターした。カーンのネットワーク、すなわちパキスタンの裏の外交戦略は中東、アジア全域に渉っていた。当然、イランにも関与していた。マレーシア出身のタヒルというブローカーが、このパキスタンの国家的裏事業を支えていた。取引の実務舞台はアラブ首長国連邦の自由経済都市ドバイだった。

核、持てる国・持たざる国

数日前、韓国はパキスタン政府に対してカーンが北朝鮮に与えたデータを送達するように要求した。パキスタンがどのように対応するか、それはパキスタンが東アジアをどう認識しているかという解答にもなる。ムシャラフが取り組んでいる南アジア自由貿易圏 FAFTA の樹立は畢竟、アセアンとの経済緊密化に繋がるから無視はできない。本音はアメリカに聴けば分かるだろう、ということだがそうはいえない。韓国も見通した上での問いかけであろう。

カーン問題が騒がしくなったのは去る1月下旬、やがて焦点はパキスタン大統領ムシャラフが、いつカーンを召喚するかにむかった。結局、双方合意といった形で2月上旬にカーンが出頭した。

インドではムシャラフはカーンを処断しないだろうと冷めていた。ネパールではふたりの会見は大きく報じられ、ムシャラフに批判的だった。

核を保有する国としない国民感情は歴然と違う。インドからフォーカスすると、カーン、パキスタンの核シンジケートが暴露されたことで充分なのだ。いまインドにとって核よりも恐ろしいのは南西アジアの均衡が破れることなのだ。国境を越えた民族や宗教共同体の鬱屈が醸成されることが局地紛争を導き出すことになる。テロとゲリラだ。タジキスタン、アフガン、ネパール、バングラなど格差を抱える諸国地域が南アジア経済圏 FAFTA の障害になることを恐れている。

南西アジアの底流にある闇という表現でいえば、核抑止力を空洞化するほどの暗夜をインドは感得している。

インド最前線 '03～04

The actual INDIA

第22回　ウサマ・ビンラディンは包囲されたか（04年3月10日）

誤報・ビンラディン拘束

2月29日、アルカイダの最高指導者ウサマ・ビンラディンが拘束されたという報が流れた。本当か。早い。というのが筆者のただちに感じたことだった。

半日ほどで誤報と判明した。BBC、CNNを巻き込んだ近来まれに見る世界的誤報だ。情報社会に及んだグローバリスタンダードの陥穽だ。翌朝の新聞はさすがに真偽判明の後が締め切りであったこともあり無視だった。しかしインドの新聞には目を惹く項目があった。パキスタンがビンラディン拘束に関してアメリカと密約したというのだ。アフガン、パキスタン国境地帯でのビンラディン包囲網に米パが連携しているという趣旨だ。

ビンラディン拘束にむけて所在を特定し包囲網を張ったという噂は2月中旬からしきりに流れていた。

ピンポイントかローラー作戦か

包囲網が巡らされているならビンラディンはいつ拘束されるのだろう。そもそも包囲網とはどういう意味なのだ。

米軍はハイテクを駆使した作戦によってピンポイントで攻撃目標を照準してきたと伝えられてきた。しかしフセイン拘束もビンラディンもピンポイントとはいいがたい。ビンラディンは山岳地帯でのローラー作戦で所在を発見され追い詰められている。ローラー作戦だとすれば地域を知悉した協力者が必要だ。作戦を実行しているのは地域民だろう。

昨年12月のこの欄（第11回印パ停戦　その2）で触れたようにアフガン、イラン国境地帯は多種少数民族域だ。彼らは山地遊牧を業とし国境をまたいで民族分布している。国家、国境意識は希薄だ。もともと国境線を行き来して遊牧している。この地域に作戦を展開するためには彼らの合意と協力を得なければ不可能なのだ。ビンラディンとその一党は彼らの支持を得ていたのだ。アメリカがローラー作戦を

獲得しているとすれば、アフガン、パキスタン双方の合意を得たことになる。パキスタンのムシャラフ大統領は少数民族への配慮を昨年来示してきていた。そこでインドのいう密約が成立したのだ。アフガンではアメリカが支配と合意を獲得したということだろうか。

アルカイダの現実

2月下旬から3月はじめのイスラム・シーア派の祭礼アシュラの時期、イラクではテロが頻発した。過去最大規模だ。アシュラはイラクばかりではなく各地のシーア派でおこなわれている。インドでも平穏に終了した。報道はアルカイダによると伝えた。アルカイダがシーア派を爆撃した。本当だろうか。ならばイラク以外のアシュラをおこなうシーアはなぜ攻撃されないのだろう。今回の連続テロは明らかにイラクの国内問題だ。

イラク基本法の調印が焦点だった時期、儀礼アシュラのモスク（イスラム寺院）は政治論議の場になるだろう。そこでの意思統一を嫌う勢力が仕掛けたテロであるのは明らかだ。その勢力はアルカイダといえるだろうか。アフガンを拠点化し反ユダヤ、反米を呼号したアルカイダはシーアを敵対視しない。

アルカイダが9.11テロ前後、多くの非合法イスラム組織の支持を得、連携したことは想像に難くない。しかし印パが和解し、ともに親米路線により深く踏み込みリビア、イランが核放棄、査察容認に傾く情勢の現在、もはやアルカイダは溶解している。

ビンラディン拘束の時期

フセインがクルドの協力によって拘束されたように、アフガン、パキスタン境界の少数民族を組織してビンラディン包囲をおこなっているとすれば現実味は大いにある。その逮捕の時期は政治的判断に任されている。アメリカは、大統領選挙勝利、ブッシュ政権維持のためのキャンペーンを意図するだろう。とすれば拘束の時期は六月から七月とみるのが妥当だ。そのとき、アルカイダはすでに風化しているだろう。イラクは基本法からの国民議会成立へむかうだろう。基本法で連邦政権を認められたクルドを巡る情勢はどうなっていくのだろう。

著者略歴

森尻純夫（インド・マンガロール大学客員教授）

1941年生まれ。早稲田大学文学部仏文科中退。1976年早稲田銅鑼魔館（現・早稲田大学どらま館）を設立・館長。劇作家、演出家として活躍する一方、民俗芸能の調査・研究に従事し、日本、インド、韓国などの伝統民俗芸能の紹介、展示制作などにも力を注ぐ。インド・マンガロール大学客員教授、早稲田大学演劇博物館研究員。

著書に『珈琲の文化誌』TBSブリタニカ、『仏教行事歳時記』（共著）第一法規。『見世物小屋の文化誌』（共著）新宿書房。

東京財団研究報告書 2004-11
現代インドの実体研究
2004年9月

著者:
森尻純夫

発行者:
東京財団 研究推進部
〒107-0052 東京都港区赤坂1-2-2 日本財団ビル3階
TEL:03-6229-5502 FAX:03-6229-5506
URL:http://www.tkfd.or.jp

無断転載、複製および転訳載を禁止します。引用の際は、本報告書が出典であることを必ず明示して下さい。
報告書の内容や意見は、すべて執筆者個人に属し、東京財団の公式見解を示すものではありません。
東京財団は日本財団等競艇の収益金から出捐を得て活動を行っている財団法人です。

TKFD

THE TOKYO FOUNDATION

東京財団